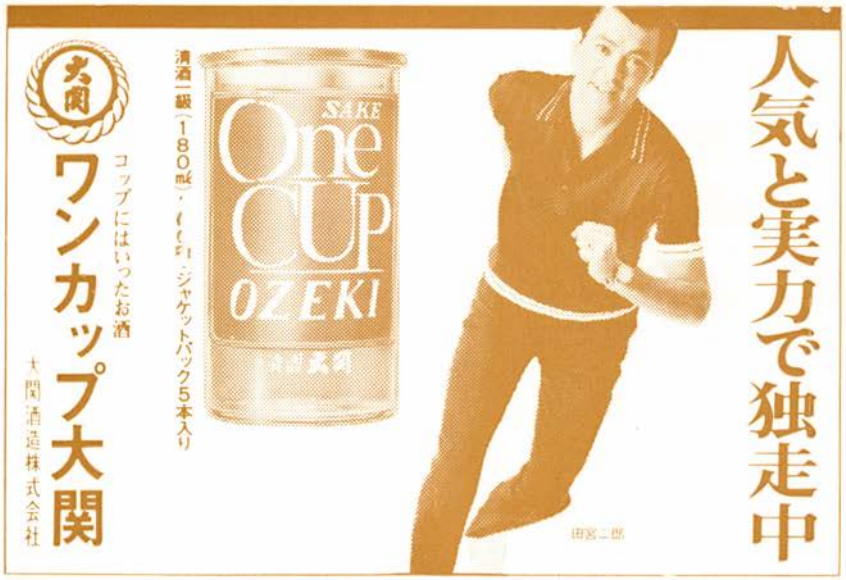
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十六年十一月二十五日　印刷
昭和四十六年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五三五号

No. 535

46年度秀句抄

十二月号



蓬莱商品の目印
551
豚饅・焼売・焼餃子
大阪・なんば 蓬莱 TEL(641)0551～2
出張販売店
なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

弥彦山上展望台に佐渡が晴れ

輪島塗閑かに科学と別な知恵

朝市のくらしへ能登の一しぐれ

奥能登に今更偲ぶ沙羅双樹

妻恋いの義経も来た同じ道

中島生々庵

歳末感

鳥兎匆々等と古めかしい言葉は使いたくないが一年位は全くあっと言う間。よくも次から次に要事が出来るものだとあきれ乍ら今年も十二月になった。その十二月が又見当も立たぬ位ぎっしりと予定欄を埋めている。これでは「春へ越す抜道もない年の関」の気もするわけである。或る能率研究家は「すべて仕事というものは片づけると、片づける程後から後から出て来るものである。仕事をするのが嫌なら仕事をせずにおればいい」と言った。看板を下ろして表戸を閉めたらいいというわけだろうが、なんの因果かそう簡単にも参らぬのが私達の日暮らしである。有名なフランスの科学評論家が言うように、われわれの躰の中の老化した器管をとり出して、貯っている老廃物を或る酵素の働きで分解、機能を若返えらしたら又元の場所に戻そうという考えが、真剣に提案研究されているとすれば、私の脳味噌なんか早速にもその恩恵にあずかりたいものだ。間に合わぬとあれば壊れかかった細胞の機嫌をとりとり秒針の刻みについてゆく外はあるまい。

（毎日ホール「賤の小田巻」の中島小石女史）

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い　（路　郎）

私の句

雲に手を振って亡妻よもうお寝み

小川静観堂

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

歳末感……中島生々庵……(1)

川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)

一笑一幼……西尾　栞……(2)

川傍柳初篇研究……(百一)……(20)

前田喜代人・故岡崎　重義・清博美・藤井　和雄

川端　柳風・故高須唖三味・丸十府・岡田　甫

46年度秀句抄……(22)

生々庵・春巣・栞・好郎・多久志・水客・形水・古方・薫風

近作柳樽……川村好郎選……(30)

雑草に晴天あり……東野大八……(28)

秀句鑑賞……(同人吟)……菊沢小松園……(27)

……(近作柳樽)……西尾　栞……(39)

ピカピカしない「ねっくれす」……橘高薫風……(42)

近詠……(41)

一笑一幼

西尾　栞

この間、東京のM社の社長から、韓国で貰った掛額に

一笑一幼　一怒一老

という対句の文字があったという話を聞いた。之は説明するまでもなく、一つ笑えば一つ若くなり、一つ怒れば一つ年をとるという意味である。之を聞いた途端、これは川柳のコマーシャルになるゾとピンときた。今まで私が川柳の社会化運動に使ってきた言葉に「動物の中で笑いを知っているのは人間様だけである」とか、チャムオフート氏の「最も空費されたるは笑わざる一日なり」とか、又サッカレイ氏の「笑いなき人生は物憂き空白なり」とかいう言葉を引用して笑いの文学である川柳を宣伝してきたが、一つ笑えば一つ幼くなるという、笑いにオマケがついているので「これあるかな」とホクソ笑んだ次第であった。先般Yライオンズクラブで、川柳についてスピーチをたのまれたので、

川柳五十三次…（十五）……冨士野鞍馬…（40）
飲んで酔い……高鷲亜鈍…（56）
双楽さんを悼む……八木摩天郎…（46）
双楽さんさようなら……河内天笑…（47）
閑谷饗……香川酔々…（47）
十二月……不二田一三夫…（45）
雅号ぶっちゃけばなし……島居百酒…（53）
雅号ぶっちゃけばなし……西森花村…（63）
初歩教室……本田恵二朗…（50）
大萬川柳「針」……川村好郎選…（52）
川柳家の暦……（十二月生まれの人）…遺稿……清水白柳…（44）
柳界展望……（薫風）…（54）
本社十一月句会……（庸佑）…（57）
各地柳壇……（文秋）…（60）
「金　策」……都倉求芽選…（48）
一路集「実　力」……浜野奇童選…（48）
「逆か立ち」……黒川紫香選…（49）
編集後記……（一三夫・葉子）…（65）

座右の句

ふるくとも僕には仁義礼智信　（路　郎）

私の句

堯・舜にまさるうれしい子の善意

故宮地双楽

試作品として長男に生まれ　好郎
家計簿をきっちりつけてゞめていず　圭井堂
間違いなやと宿題親にさし　花村
たして二で割ればなかなかよい夫婦　多久志
赤ちゃんが突如気持の良いおなら　形水
盗人の逃げた窓から首を出し　小松園
お寺さんスイスイと奥へ行き　いわを
倒産旋風うかつに臨休貼り出せず　静馬
後輩にスタミナ源をすすめられ　葵水

あと十数句、このようなユーモアな句を説明つきでしたあと、最後に、川柳の中に、誹風末摘花（寿恵津睦花）という破礼句のあることを話して、その例句に、

枕絵の通りにすれば筋違え

という句をあげたところ、百二十人程の会員がドッと笑った。そこで、すかさず、今笑われた皆さん方は、御経験のある方でありましてというと、またドッときた。これで二つ若返っていただいたことになりまして、本日の私の話の目的も達せられました。と笑いと拍手の中に降壇して元のゲスト席に戻ると、卓上の一輪ざしのバラの花が、笑い声で左右にゆれているのが目についた。

卓上の花もゆれてる大笑い　栞

中島生々庵選

天気図と逆に台風向きを変え
マンションへ住む張板をもてあまし
ちっぽけな見栄をサンマの目が覗き
るすも又たのしからずや冷蔵庫
高槻市　若柳潮花

素人にまだ毛の生えぬうち名取り
追いついてニックネームで呼び止める
秋祭り娘も鶏の毛をむしり
月だけを残してベンチみんな去に
蟬の死を土へ返して花を植え
大阪市　山川阿茶

早変り裏方さんへ拍手来ず
老夫婦二人になって明治調
不用品金に換算して捨てる

切れぎれの夢に時々灯をともし
言い直すたんびに焦点ぼけてくる
曲がろうとしないで水が逆しる
ご先祖はたとえ賊軍でも旧家
妻の留守子は父親を頼らない
堺市　吉田圭井堂

日陰者にしてはでっかい自衛隊
末法の世だが憤死もせずに生き
冷凍でないのは人間だけとなり
直ぐ補正組める政府が羨まし
遣い途も知らずに蓄めた成り上がり
大阪市　本多柳志

アルバムの喜怒哀楽の色も褪せ

京都市　都倉求芽

二学期へバイトずれした顔で来る
どちらにも一理はあれどそこのとこ

神戸市　小浜牧人

散髪の既に心は旅にあり
工場街風は季節をのせて来ず
会心のヒットも打てず老いゆくか
空港のポーズ陣笠とは見えず
秋晴れを犬先きになり後になり

宝塚市　傍島静馬

浮き沈みあった余生をコーポラス
PTAぎらいで教師の無精髭
ノッポにも取柄ホテルのドアーマン
秋風に乞食もいささか衣替え
ナポレオン開けずじまいで癌を病み

岸和田市　高橋操子

ついて来てくれる娘に気がつかれ
松茸山へ行った積りの卓囲む
人間の裏知り合うて気をゆるし
母と娘が心くみ合う定休日
押売りと思えずそれぞれの生きる道

岡山県　出原敬一

おでん屋の鍋にうれしや秋の物
塩さばの目つきも寒い十二月

小肥りの妻も袷をさがし出し
口ほどにない先輩の肝っ玉
納まって笑いをしおに腰を上げ

倉敷市　小幡里風

見つめれば金魚も何か見つめてる
舌打は受話器を置いてからの知恵
曲げられぬ主義を通した無精髭
実印を嫁に委せている老舗
毎日を負けてはならぬカーブ表

倉敷市　水粉千翁

間に合うた疲れ楽しく寝押しする
マネキンのスタイルで着て腹を立て
左右から金を敵としてすがり
責任は持てぬと首の座を守り
許されて一輪差しの花に悔い

青森市　工藤甲吉

女房の代替品はすでに無し
一枚の舌は不便なものと知り
また一人あぶくが消えるように死に
票とあらばセンセは股もくぐります
こおろぎのむくろ拾つて秋深む

大阪市　大坂形水

隠居先き訪えば外遊中とかや

マンションの気楽さ知った老夫婦
近所まできてる電話に呼び出され
六甲のこんなとこまでキリン草
盛り上りないまま今年も早や師走

諫早市　原田明春

倦怠期過去の寝言にもめている
コンピューターが判別をした指定席
負けん気があせりスタートで転び
うたた寝も手当に入れている議会
商人の方がはりきる秋まつり

東大阪市　竹中肖二

金ピカの厨子天皇の御持仏
たまに行くデパートだから疲れ果て
一匹が獲物見付けた蟻の群
咳ばらいうつろに響く妻の留守
木犀が匂うて雨に叩かれる

京都市　松川杜的

ご本尊不在でもおんなじ拝観料
散り敷いた木犀の白を眷れ残し
折鶴と対話病床は七度五分
無雑作に萩がこぼれて萩の寺
百円分テレビ切れたで眠るとする

出雲市　尼緑之助

路郎賞受賞（一句）
栄光の受賞友情に囲まれて
孫又増える（一句）
似たとこを見つけいい子が生れたな

独仙氏金婚（一句）
五十年まだまだ若い二人にて
週刊誌化して中国を持ちあげる
盃よ素朴な絵付がうれしいぞ

大阪市　金井文秋

十年添うても愛を確めたい女
パパはママ愛してるのと子がませる
病身にリスの動きも羨まし
ぼけなやと云うてて先きにぼけてくる
猫と話し小鳥とはなしまだ子なし

東京都　増田次章

台風に思いあがりを叩かれる
マイホーム貯めてる金と鬼ごっこ
マナーもいいが叱言が多すぎる
他人のだから金策に駈けまわり
おえら方揃ってきたからきっと寄付

姫路市　村上春巳

人生の余日を埋める土いじり
ふと我に返って横の妻を見る

我が家でもこたつ聞きの鍋料理
ストレスのやり場に御輿の秋があり
羅漢様それぞれせわし気なお顔

貝塚市　野坂つき子

断切れぬ心へもいちど聞いてみる
流行を追って中味のない女
完璧な装おい足元から乱れ
世渡りの術使いすぎ落ちぶれる
久しぶり虹を見つけて救われる

岡山県　浜田久米雄

尼緑之助氏へ
日御碕が待ってる路郎賞の句碑
駈足で来る十二月に追い越され
句碑の寂び見に来た人に指さされ
散髪をして一年を終りとす
忘年会の酔いが残ったまま出かけ

倉敷市　田垣方大

本当に惚れているから酌ぎません
忠告をはいはいはいと靴の紐
追い抜いてみれば男性だった髪
満月へ嫁いだ娘のことばかり
からだごと秋にひたって山楽し

本田恵二朗

心のみずうみで童心が泳ぐ
清水湧く里で素朴を拾い当て
磯の松波追い返えし追い返えし
岩毅然怒濤に胸をかしている
波にさからうまいとして浮き沈み

門真市　福島鉄児

こおろぎの残る命を鳴きつづけ
お供えを頂く小さい手を合わせ
老夫婦互に先に死ぬと云う
ふるさとを想う日もあり寝られぬ夜

長男十一月挙式

用意万端整い挙式まつばかり

大阪市　天正千梢

火の熱さやけどしてから気づき
美しいものの一つに祈りあり
無意味な会話で今日も暮れ
人生の縮図のような花育て
そのみじめさ言いわけ多すぎる

大阪市　福井野迷路

胸張って心斎橋の脚慣らし
外交を引っ張るピンポン球軽るし
女かと聞けば長髪声低し
畏まって聞いてる方が余計識り

それがそのまああのおとは借りた銭

大阪市　正本水客

奥能登行

潮騒のなかへ終バス迎えられ
山門の雨のしずくも旅のもの
輪島の朝市　旅人の靴になる
断崖の裾にすがってランプの宿灯る
窓はすぐ生きてる波と虫の音と

豊中市　戸田古方

毛糸編みそんなにおもろいの　おんな
精神主義といえば何やら右翼めき
公害の川かしらんが朝は晴れ
迷惑やなあ雲　雲に何がいいたいの
光化学スモッグ空気あったんだ

八尾市　香川酔々

シャンソンをバックに虫の声を聞く
月上がるボタ山炭坑節が消え
友情の揺れる青空万国旗
出る杭をよってたかって打つ響
日航機七つの国で菊匂い

堺市　河内天笑

満月を蹴上げて山は寝る姿
豆腐屋のおつりはみんな濡れてくる
話みな取られた席で飲みすごし
仁義礼智信ニクソン知らんこと

父

雲のみね働き抜いた汗をふく

大阪市　橘高薫風

中年や　初秋に多き赤い花
黙契や　野に紫の花が増え
革命へ　音沙汰なきも志
木犀と星が漉すなる　この夜気か
秋が来て　笛は太鼓を恋しがる

大阪市　不二田一三夫

背広なんて盗作スタイルだとさ
喪の家にドラマの後篇はじまりそう
日本という字は筆で書きたまえ

寄席（二句）

芸歴三十年がアイデア一年生に食われ
芸能社かわるたんびにうすぼける

倉敷市　野田素身郎

秘密打ち明け責任を分割す
次で下車するらしいコンパクト覗き
健康だけが取り柄の妻に寝込まれる
僕の部屋だけが残業秋深し

藤井寺市　西いわお

公認と云うて仲居に連れ出され
キリストへ懺悔するには顔円し
泊る気も帰る気もあり孫の智恵
先頭を切ったメダカへ附いて行く

高槻市　福田丁路

ハイカーの拝む気配の無い神社
結論を先に云うがとドンピシャリ
生甲斐の無い人生にしがみつき
ドル・ショック時代の顔でない地蔵

奈良県　石倉旅風

もっさりと鞄をさげて独り旅

八月十七日（一句）

こおろぎが幼い声で鳴きはじめ
雲を見ていたらこころも雲にのり
一升瓶当てがわれて気を見られ

鳥取市　河村日満

山中にて（二句）

名勝へすでに句があり歌があり
菜石巌にひとりおくれてまだみつめ

祥月氏の還暦に

還暦の君なら恋も拾えそう

円切上げに

宣戦布告と同じ活字で円上る

尼崎市　黒川紫香

ポツネンと守衛一人が何か書き
鮒一て残って水槽冬が来る
夢見たいな話本気で云う瞳
ポケットに忘れた女の名刺が出

大阪市　水谷竹荘

しなびゆく色気唇ひからびる
愛情のもつれは金ですまされず
赤電話家でいわれぬこともいえ
二次会の会費はもてたのがおごり

西宮市　若林草右

釘曲げた音で金槌小休止
東海の小島に蟹はもうおらず
アンテナもカラーは大きな顔で立ち
笑いあってすんだ夫婦の物忘れ

倉敷市　藤井春日

流行を追えば追うほど三枚目
2DK仏に済まぬ足を向け
理屈屋の上司へ意見する若さ

西日本川柳大会風景

琴の音に乗せて披講の名調子

姫路市　隠岐不酔

弁解の相手もあって若く生き

よう知ってる近所よく言い悪くいい
転んだり亡ったりして古稀むかえ
うらやまし隣りは秋刀魚焼いている
八尾市　高杉鬼遊

酔い痴れる男仕合せそうに見え
労わりの言葉は妻へ見当らず
観世音一千年を笑み給い
悼　塩谷喜久次氏
一喝がもう聞かれない菊昇天
大阪市　西出一栄

眠れぬ夜豆球一つが明かすぎる
好きな色知ってリンドウ活けてくれ
十円で氏神朝を起される
無為徒食病むを知らずに羨まれ
大阪市　中川滋雀

傘さしたままと気付いたアーケード
レールいま期待を乗せてカーブする
ちぐはぐな返事すらすら出てしまい
墨色に焦りが走る筆のあと
桜井市　岩本雀踊子

事務をさぐり合ってる同窓会
ちっぽけな暮しに小銭音を立て
よく稼ぐ妻の帰えりをまつ炭火
ふれ合った心も夫婦と云う夫婦
倉吉市　奥谷弘朗

気楽さを民主主義だと思いこみ
うち解けた顔で急所をはぐらかし
欲のない人で気軽るによくしゃべり
認め合う心があって世は丸し
米子市　八木千代

白い杖風の動きにふと止まり
しあわせと思われていて泣けもせず
燃えぬまま伴侶をきめる娘があわれ
箸袋日誌に貼って女寝る
島根県　堀江正朗

巣立つ子の羽ばたく音におびえまい
臥す妻の欲はアンカの温み程
軍神になりそこねて鍼灸マッサージ
神様に酔うた元気で愚痴も言え
大阪市　木村水洞

古えの驕る平家に似た与党
経済力あって女も負けていず
見知らぬ人と盃くむも旅の宿
ライバルが死んで生甲斐一つ減り
岡山県　直原七面山

けちな男のけちな言い草

男やもめにやるせなき梅雨
肩組んで行うよ二人だけの道
男を意識して生きる女の身だしなみ

堺市　藤井一二三

川村好郎先生入院（一句）

そっとして置きたしベッド見舞い度し
舞台から客のあくびを見て仕舞い
血を分けた仲を他人にした遺産

河内天笑氏厳父逝く

今日友の笑顔を消した柩出る

岡山県　池田古心

金持たぬ親なり小そう小そう生き
釣りに行き釣られて帰える日が多く
ストリップ六十過ぎの鈍感さ
老人会出席なんて真平だ

松江市　中川晃男

両陛下ご訪欧（二句）

お帽子振られ皇后スマイルでお着き
タラップ一つずつ陛下御用心
べっぴんの方が職場に売れ残り
待たされるからはめている腕時計

大阪市　児島与呂志

へそくりを出しあう夫婦のつつがなし
朝顔がそろそろ秋に咲きかける
娘らの目に父親の酒馬鹿に見え
テレビ見学バスで迎えにだけは来る

平田市　久家代仕男

農繁期の庭ひっそりと柿が熟れ
仁王門ひっそり暮れて虫しぐれ
智恵の無い施策は惨事あってから
山茶花にあるみの虫もつけて活け

富田林市　岩田美代

向う様の都合が私を歓迎し
感情を押える畳冷えて来る
残り火が炎えそで消えそで秋になり
ほんとうの心を言えばらしくない

大阪市　有信新之助

複数でする抗議は胸を張り
見て呆れ尺に直してまた呆れ
新築に借りた甲斐性をうらやまれ
悪酔へ訳を知ってる眼が押え

守口市　村田瓢太

アメリカの浪費の尻を拭わされ
株暴落退職金までパーとなり
胃切ってからも只酒だけは飲み
吾唯知足・戦中戦後は辛らかりき

鳥取市　清水一保

実力の差ともお金の差とも云い
旅を終ってもう用はなし週刊誌
村祭り太鼓も過疎の音で鳴り
やせたりと云えど五体に燃えるもの

大阪市　江城修史

恩師七十七才の誕生日（一句）
闘病へ喜寿と大きく師の便り
真相を知らぬ他人の後指
現役を去る挨拶が弔辞めき
妥協なき勝者の顔にあるかげり

松江市　柳楽鶴丸

自分でつくる天国へのぼる梯子
不況ムードこれが今年の顔である
貝になりたい情報化時代の渦の中
さよならが今日はのどにひっかかり

兵庫県　遠山可住

そろばんをはじいた上の勇退さ
三日分それまでなおらない薬
朝晩に秋が混って風邪もらい
糸編みながらくどくど聞いてあげ

松江市　吉岡逓児

九分九厘外れる公算大の穴
垣根越し届く隣りの柿の出来
妻の留守こうろぎと酌む味も秋
誰がための媚か過疎野の曼珠沙華

東大阪市　竹中綾女

宿浴衣有馬の月の寒さ泌む
秋空に放牧の牛絵となりぬ
一泊に三度つかった有馬の湯

泉湧寺展にて

楊貴妃はやっぱり美人だったらし

笠岡市　出原真奇

猫の死

ご近所も猫の悔みを云うてくれ
登り馴れた柿の木の元へ埋めてやり
そう云えば俺にも二三日よくジャレて
急カーブバスもへの字になり曲り

松原市　谷垣史好

女みな小さなお店出したがり
大僧正らしく見事に禿げ上り
ホモっ気があるのかやわらかな握手
暗闇の中でも顔があかくなり

大阪市　宮尾あいき

子の始末主人まかせで猫は産み

一栄さん句集を祝うて（一句）

ねっくれすは真珠気品とまろみあり
友病んで神に願いが一つふえ
月並の慰めしか云えぬもどかしさ

大阪市　小出智子

幸せの真只中で死を想う
灯を消せば病む自画像が闇に浮く
心貧しき秋の夜の洗い髪
言葉少なく日溜りを父といる

大阪市　河野君子

体育の日の母多忙に甘んじる
冗談にして本心にベール張る
　一栄さんの句集を祝うて（一句）
ひもとけば灯下に映ゆるねっくれす
　知人を見舞いて
山海の幸を積み上げ喉を病む

広島県　高橋鬼焼

目かくしをといてごらんよ飛行雲
秋晴へ稲刈る妻のうすい紅
たとえばの話で私をせめてくる
化粧瓶並べて夜の顔にする

笠岡市　木山遠二

清潔な人で白髪の美しい
百薬の長　老妻にも一つ酌し
命惜しと思う日多し古稀迎え
快晴無風ただコスモスがゆれて居り

伊丹市　小川静観堂

　ある青年の結婚（二句）
幕間いのない人生の幕が開き
天高く歯車の音さわやかに
男ッていつでもマッチ一本で燃え
崩子ひとりの茶の間俺ひとり

今治市　越智一水

だん畠命きざむよう作り
角材をふるより恋でもやり給え
　十和田湖にて（一句）
紅葉へ湖酔うた色となり
　乙女の像
ほろほろと裸像へ散るも紅葉かな

枚方市　宮川珠笑

にこにこと云いたいことを云うている
ゴキブリを追うスタミナも失せて病み
ローン無事払えますよう地鎮祭
番頭と呼ばれ万年係長

愛媛県　村上旭童

おみこしへ今日は車の方がよけ
ドル・ショック田ん圃へ届きはじめたり

酔眼へなる程今日はよい日和
離農させておいて野菜の値にふれる
兵庫県　大江秋月

検札があきらめて行くほどに寝る
底辺に作む雑草の艶を持ち
制服をぬげば八時間の疲れ出る
塵捨て場朝顔小さな顔で咲き
岡山県　大森娯句楽

名台詞吐き出しそうな菊人形
手のひけぬときに間違い電話鳴り
村祭り晴着へ狂い獅子が戯れ
ギター弾く肩から膝へ紅葉散る
大阪市　吉岡美房

シグナルの青へどっちの足で出る
腕組んで男を示す日の姿勢
過疎の村星のまたたく音がする
当直の受話器を置けば虫の声
愛媛県　渡辺暁童

物忘れ声にならないとこから出
六十になっても猫好きかわらない
お祭に物干竿の置き所
わびしさは東京タワーの裾あたり
堺市　高橋千万子

秋はよし心のすきま菊で埋め
進学の焦点合わず秋深む
名月へ科学ちょっぴりうらまれる
早寝早起きひるねも入れてマイペース
倉敷市　小野克枝

刺の無いバラになりたい割烹着
捨てられる猫がねずみを捕ってきた
見えすいた嘘へうなずく日をおそれ
頼られている冬の陽が暖かい
東大阪市　久米奈良子

待つ駅へ秋さわやかに訪れる
陰ながら祈る絵巻の美しく
その胸をはかれば愛の深さなり
月満ちて何ゆえ雲はひた走る
鳥取県　森田布堂

春を待つ木立ちは秋を散って見せ
先祖よりでかい石塔ばかりふえ
根性もさすがに寡婦の子沢山
お守りは掏られ財布は無事でいた
倉敷市　竹内翁童

妻の留守思ったほどに落ちつけず
なさぬ子がなつき妻の座を確保
黙秘権かたくな心へ母を呼び

就業が決定寄せ書きの太い文字
倉敷市　松下梁水

人生の壁へ愚妻の智恵も借り
青雲を答辞に秘めている若さ
ラブレター英語のとこがツボらしい
心中までする気にさせた人は嫁き
和歌山市　垂井葵水

胃の調子酒で消毒して忘れ
リモコンの亭主が握っていた造花
ご同伴お見計かられた膳につき
二次会を断るだけの診断書
東大阪市　宮西弥生

明日の雨知らせるように島見せず
満ち足りた今日を流す終い風呂
それからの愛へ邪魔な時計打つ
着る人が待ってる夜なべのミシン踏む
高槻市　山田季賛

僕にだけわかる子の意見聞く
合併の故郷道路も舗装され
今少し野心があるから黙っておく
受話器の方が僕の気性を知っている
富田林市　木村弥栄子

宝石のような想い出あるすくい
殺人の過去持つ中古車かも知れず
退屈な女を連れて長い道
永遠に愛したいからピリオド
大阪市　川口弘生

苦労した腰の低さは直らない
無差別に焼かれた傷のまだ疼き
うちとこは貧乏だからと納得し
肩書きが落ちて人間取戻し
大阪市　西川誓二

万物流転性を悟れば無喜無憂
晴耕雨読させてくれない退職金
お茶が出てそれから長い応接間
誘われて七人の敵と縄のれん
下関市　国弘半休門

旅と山
牛連れて降りて阿蘇山野火にする
桜島洗濯仕直す灰が降り
天と地のくぎり白根山は座す
頂上に居ても屋島は魚を飼い
神戸市　仲どんたく

Y君死す（一句）
そのうちに行くから待てと合掌す
なつメロが枯木に花の咲くように

絞り出し歯磨きのように順に逝き
秋の蚊の波状攻撃けなげとも

香川県　岡田拳法

ドル・ショック儲けてる奴よう騒ぎ
悪いようにはせんやろと祭り上げ
押上げてやれば味方と違うなり
真剣に問う若者に刺戟され

鳥取県　鈴木村諷子

夕陽いまミレーの画布をぬけ出でし
忠魂碑旧国道に忘れられ
平和の鳩がうちの畠の豆を食い
チップ挿す妓の深い深い帯

大阪市　市場没食子

腹にもないお世辞酔うたら上手に出
金もない癖に売名の寄附は出し
若い先輩に要領教えられ

名古屋市　吉田水車

まあきれいまあきれいで結婚式がすみ
あのミニが裾をひくとはあほらしや
何もかも気に入らぬのも明治者

島根県　藤井明朗

義理人情もう父だけのものとなり
ビラ攻勢せわしく街を冬にする
ドル・ショックライバル情報もってくる

堺市　吉岡青香

神様を拝んだ口でうまい嘘
逃げ出した小鳥古巣の平和知る
夢のよな数字日本の二〇年

宇部市　平田実男

止まり木へ案山子を使っている雀

兄嫁の死

声かけて来そう供花に埋まる顔
骨壺を兄くしゃくしゃの顔で抱き

松江市　小林孤呂二

京都が好きで和服着てばかり
山脈は時雨て出雲路の秋は濃い
燃えさかる恋を押えんとする愚か

大阪市　太田良子

ドル・ショック隣りも仕事の音が減り
景品でもろた香水つけて寝る
夜遊びの娘　母の笑顔へ面喰らい

竹原市　森井菁居

衣食住足りて霊長族の愚痴
たくましく伸びて雑草嫌われる
原点をしっかと抱いて世に遅れ

呉市　林野甦光

式順を一部取消す長祝辞
目が合えばライバル笑顔で会釈する
夜を稼ぐ女の朝が白々し

松江市　恒松町紅

日照権秋の太陽見直され
かまきりのような女に過去があり
グリン車の地酒の味もローカル線

奈良市　宮口笛生

伊豆半島一周の旅より
海の幸伊豆細長く温泉のけむり
伊豆の雨湯もやに濡れた宿の傘
間をもたすガイドお吉の物語り

笠岡市　松本忠三

当てこ擦り嫁平然とした構え
老僧も婆婆に未練があると言い
栄光の軌条鉄屑としての価値

米子市　林瑞枝

猪突猛進私はブレーキ役の妻
達筆の便りソファーで拾い読み
古老いま骨董の値打で愛される

芦屋市　丸川初甫

ドタ靴も宿の常連揃えられ
スロースローダンス背中でサインされ

書道展芳名録へ字がかすれ

八尾市　飯田悦郎（一治改め）

糊付けが終り造花の音を立て
ネクタイも簞笥の中で派手になり
思い出を起さす人にふと出会い

松江市　岡崎祥月

親馬鹿のサンプル笑ってことがすみ
夫婦喧嘩したい夫婦で笑いこけ
漫才のカップル妻と俺のこと

奈良県　草深酔升

やれやれと思いこれからとも思い
雨の夜もこおろぎ鳴いて秋惜み
おがみ屋も或る日易者に観て貰い

守口市　羽原静歩

松風の中に凡鐘の銘を読む
釣橋を渡る老いの影法師
錆止めのいくら塗っても四面楚歌

大阪市　室谷徹舟

強情と別な信念買うて呉れ
世話したい男嫁さん欲しがらず
結納を四角になって持って行き

大阪市　河井庸佑

天気予報信じた傘が邪魔になり

相変らずが何よりだというくらし
ご来光迎える積りで床に入り
小松市　馬場魚山

腎臓を病んで味覚の秋でなし
敬老の日も朝食はパンですみ
胃のリズム狂う恐さも秋祭り
尼崎市　高津徹也

豚小屋を改善しつつ村伸びる
過去のない裕福な女失恋す
長つ風呂世間は狭い人と会い
松江市　舟木与根一

認め印でよいどうでもよい書類
銀婚に思う
喧嘩しいしい甲斐性がなくて無事
押しもおされぬ亭主関白出来あがり
大田市　藤田軒太楼

申告にいささか気になる隠し事
定退の世捨人にもあるやま気
とんとんで先ずは乾杯役員会
兵庫県　河原みのる

一票の権利持ってるだけの長生き
福祉年金十年生きる手帳くれ
喪服置いてキトクすごすご解散し
大阪市　今西章雅

眉へつば忘れ話術に引っかかり
運動会校長スモッグを案じ
孫ほどが混じる受験へ勇をこし
和歌山県　野村太茂津

思い出もさして残らず秋が来て
赤い羽根嘘も誠も同じ色
Gパンがしずしずしずと巫女に化け
出雲市　原独仙

旅行吟（二句）
カップルに金婚旅行うらやまれ
重役も駅弁今日は慰安会
七十歳欠伸耐久力欠如
岸和田市　葛城伊三郎

万象を照らす鏡に写る是非
保母さんを下見してから子をあずけ
髪のばし赤い物着て何出来る
新宮市　大矢十郎

肘張って地主の伜が切るテープ
ぜいたくな女おとこの腕を選る
出稼ぎの夫に済まぬ嘘に馴れ
八代市　永松道雄

養鶏が児等の学資を生み重ね

明暗の一夜がしらむ外科病棟
進歩する世代文化が身をせばめ

島根県　小砂白汀

雨ポツリポツリ受けとめ水笑う
熱し易く冷めやすく底辺にあえぐ
どうにでも取れる言葉でいる非力

鳥取県　谷無閑

再婚をし人間の巾が出来
夫婦仲よくて姑の目を恐れ
女患部屋退院近く毛糸編む

堺市　伏見茂美

還暦へ歩巾を合わし話す孫
謎秘めた五百羅漢に立ちつくす
寄せ書きに隅探がしてる拙い文字

大阪市　飛田好一

新聞も表情を変え大事件
大臣も友達なみにコップ酒
　断酒して
酔いしれし頃ふり返りふり返り

東大阪市　斎藤三十四

一命を取り止めましたが中風
ビールなら飲めます嫁のあなどれず
ニコヨンの感激知事さんと握手

★

菊沢小松園

泣いてても女勘定間違えず
社長まで呼び捨てにする労働歌
籠を出てからを小鳥の考えず
旅先きの昼の月さえ見遁さず
　悼　宮地双楽氏
和の心蓮のうてなへ横すべり

若本多久志

インタビュー煙りにまいて帰えす智恵
政治不信ただ黙々と金を溜め
　ある結婚式で
三度目に着替えて本人らしくなり
　老の（二句）
掛け引という言葉さえうとましく
自分でひいたコーヒーの味秋の夜

北川春巣

奥さんのリモコンか猪口重たそう
LLの売場大きな字で書かれ
寄席へ来て笑わな損の笑いよう
風邪に臥て昼のチャンネル追い廻し
駅をきれいに屑かごを置いただけ

西尾栞

カウンターに懸崖の菊あり集金日
集金の女将菊の一鉢約束し
髭の社長菊の社長と親しまれ
孫の手に菊の無残を並べられ
菊師の口元菊人形の口になり

川傍柳初篇研究

（百一）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

611　御室の児ハくうふくな紅葉狩　　水砥

高須＝上五は「みむろのちご」中は「空腹な」で、仁和寺の法師達が稚児を誘いだして紅葉狩りに出かけたが、散りしいた紅葉の下へ、かねて隠しておいた酒肴を何者かに先取りされて、ついに飲まず食わずの紅葉見物になってしまった……という話が、徒然草にある由で、手許の本を探したが「徒然草全釈」が見つからず、何段の話であったか判然とせぬ。とにかく主題句はそれを詠んだ句。

岡崎＝。「徒然草」第五十四段。御室の法師どもが飲食物をいれた破籠（わりご）を双が岡のある所に、あらかじめ埋めておいて、稚児を誘ってその辺を遊びまわり、さて数珠をおしすり、印を結んで、さながら祈り出したように見せかけようとして失敗し、ついにお互い同志の間の口論に終ったという話。

　弁当の事で御室の仲間われ　　四一・2

丸＝賛。

岡田＝同。ただし「御室」はミムロでなく「オムロ」です。

612　ぬいて上ケますと西瓜を二ツぶち　　一甫

高須＝「うけあいます、これなら大丈夫です」と、ポンポンと西瓜を二つ打ったという句で「ぬいてあげます」は実入りを証明する「窓」を「あけます」ということで、この音で信用して下さいと、西瓜売りが言っているのである。

前田＝賛。「ぬいて上げます」は、よくうれたのをぬいて（選んで）あげますの意。

丸＝「ぬいてあげます」は高須説の通り。

岡田＝これまた前田説、ご明解。果物屋はいうまでもなく、西瓜をたたいて、その音でよく熟しているかどうかが分かる。やはり「二つ打ち」については、この説明があった方が親切。

613　娘をねらったが御袋が出来る　　泉河

高須＝娘をねらって通ったのに、そのお袋さん（母親）が出来てしまった。という句で、このお袋は後家さんであったか。「娘をキズモノにされるよりは……」とこの母親わが身をギセイにしたは、いい気なものと言いたい。

前田＝前解でいいと思うが「お袋が」の「が」からうける感じで、次の解とあいなった。あの娘なら琴がうまくなるだろうと娘をねらったが、そのお袋が娘よりうまく出来るとはどうであろうか。勿論、琴でなくても芸ごと、カルタなど何でもよい。

岡崎＝娘をねらって通い、うまくとり入ったのはよいが、母ひとり娘ひとりとあって嫁に貰うわけにいかず、入り聟の境涯とあいなった。

清＝高須説に近い考え方をしている。「お袋が出来る」は、お袋とできてしまったという意で、岡崎説のように母親が出来てしまったという意味ではあるまい。助詞の「が」の説明が十分に行なわれるべきであろう。男の方は若い娘をねらったのに、出来たのが大年増のお袋ではいささかヘキエキしたであろう。

藤井＝「出来る」とは前田説技能ではなくやはり川柳的に「関係が出来た」と解したい。従って清説を賛する。「が」の説明は娘をねらったのに「めんどうな事に」「やっかいなことに」の意味で、即ちねらった娘とは首尾よく夫婦になれたのに、やっかいなことに別に母親とも（おそらく後家）関係ができてしまったわいという芋田楽のケースではあるまいか。

「お袋と出来る」とすればすっきりする。「と」「が」が同意義に慣用されたのではあるまいか。

川端＝

母もよろしくと踊り子座になほり一八・3

母の供娘のころぶ所まで
から踊り子とその母親で

踊子の母あつかましいも見る　七・41

の類かと思ったが……？。清・藤井説とも考えられるし迷ってきた。

丸＝句意は娘をねらったが、それは思うにまかせず、かえって母親と出来てしまった。上の「が」は逆接の助詞であることはいうまでもない。下の「が」はお袋が積極的なので、それにつられて、意外の結果となったという意を含めたものか。

岡田＝将を射らんと欲せばまず馬を射よで、娘をねらって、まず母親の気に入ろうと心がけてる内にお袋といい仲になってしまった。これでは馬は射たが目的の娘の方は逃がしてしまったという人生喜劇の景。

614　在家より一ト月早く月を見る　　五　雲

高須＝普通の人（俗人）の月見は八月十五夜であるが、芝山内の僧達は七月二六日夜の、品川の月を見て悦んだ。本当は正月と七月の二六日の夜半に出る月は、出でんとしてまず三尊の弥陀の像を現ずると伝えられて、高い所の海岸の眺望のよい所に会宴して、この月の昇るのを待った。すなわち「六夜待」である。それを詠んだ句。

清＝「六夜待」については高須氏説に賛成するが、主題句については吉原と品川の対比をしなければならないと思う。主題句における在家は吉原と考えるべきであろう。つまり、七月二六日には僧侶が品川で、八月十五日には一般の人々が吉原で、それぞれ月見をする、という句意であろう。

藤井＝「在家より」で「一般の俗人の月見より」の礎稿でよいと思うが。

丸＝出家に対する在家で、吉原まで考える必要はない。

岡田＝同。吉原の月見は大金を要したので、一般的には考えられません。吉原は除外して考えること。

46年度

選考委員（順不同）

中島生々庵　川村好郎
北川春巣　正本水客
西尾栞　戸田古方
若本多久志　大坂形水
橘高薫風

―太字は入賞作品―

灯台の夕陽　神話を抱きよせる　出雲市　尼　緑之助

久々の素足へ女たかぶって　米子市　八木千代

煩悩は裂けし柘榴に極まれり　大阪市　吉岡美房

この俺を信じてつなぐ小さい手　東京都　増田次章

知らん間に二十二年も夫婦なり　大阪市　児島与呂志

ひとり旅細道ながら夢があり　東大阪市　久米奈良子

濡れ衣を着たまま神を信じ切り　倉敷市　小幡里風

サービスに白紙で渡す領収書　大阪市　有信新之助

毛皮着て女にめぐる獣の血　大阪市　橘高薫風

たまに逢う恋は指先まで喋り　貝塚市　野坂つき子

骨にすぐ着物着たよな父達者　笠岡市　出原真奇

退職の子守は髭をつけたまま　兵庫県　遠山可住

父の忌や父に習うた普門品　下関市　志賀木石

岡山市　川端柳子
結ばれた枝のみくじも春を待つ

竹原市　山内静水
下積へハイと答える妻のいて

大阪市　本多柳志
美しく死にたい欲も持ちはじめ

青森市　工藤甲吉
人間のおしまい箸で拾われる

大阪市　小出智子
口紅が褪せて女の業果てる

大阪市　宮尾あいき
長男も嫁の実家へ近く住み

岡山県　出原敬一
質屋へも通わせた肩揉んでやり

大阪市　天正千梢
ただれた心観音様が抱いてくれ

大阪市　橘高薫風
大文字酔醒めるよりはかなしや

倉敷市　小野克枝
転ぶことさえ女という不便

下関市　志賀木石
沈痛に焼香してる債権者

八尾市　高杉鬼遊
かたつむり今更家を捨てられず

富田林市　岩田美代
救いようない沈黙に雨の音

出雲市　弘津柳慶
長男の下宿へ長男とゴロ寝する

松江市　中川晃男
手をつなごなんて結局みな孤独

大阪市　天正千梢
歯車は個性の表現許さない

松原市　谷垣史好
その言葉を教えた人は死んだんだよ鸚鵡

八尾市　宮西弥生
京の庭みな善人にして帰えし

大阪市　正本水客
タンタタンタン朝は港のリズム持つ

島根県　堀江正朗
一年分の声聞き貯める手の温味

京都府　大鶴喜由
生活にひびかぬ嘘は聞き流し

愛媛県　渡辺暁童
銀婚すぎた以心伝心

島根県　小砂白汀

・あるときはつらら曲って見たかろう

青森市　工藤甲吉

米余る国で雀はまだ追われ

富田林市　岩田美代

今日だけはネジ巻かれて踊るまい

大阪市　山川阿茶

心ない人から知った二号の子

大阪市　吉岡美房

兄さんで居ってほしいとことわられ

大阪市　本多柳志

読む自由捨てる自由へビラを呉れ

青森市　工藤甲吉

口笛が吹けて少年らしくなる

大阪市　西森花村

言うなれば小骨の多い女にて

大阪市　有信新之助

すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き

岡山県　浜田久米雄

年寄りのうれしさきょうは腹がへり

大阪市　福井野迷路

これ心　王者の如く歩ませよ

兵庫県　遠山可住

通夜へ急ぐ白きを桜と見て通り

高槻市　福島鉄児

お向いのホームは冬の日が当り

大阪市　金井文秋

誤字なんぼ直されてても気が付かず

大阪市　橘高薫風

長男の頭へ手を載せやすき背丈

（最終選に洩れたが中間発表二回以上の人・編集部選）

和歌山市　垂井葵水

意地持たぬ落葉が風のまま転げ

岸和田市　内藤きさ子

拍手する片手は義理の音がする

米子市　林瑞枝

はばたきを見守る母にある孤独

大阪市　吉田圭井堂

この水に馴染めと小鮎放たれる

東大阪市　竹中綾女

漬物の茄子の色よき夕の膳

今治市　越智一水

戦傷へ日の丸立てぬ意地をもち
大阪市　神谷凡九郎

失保でももろてと夏を辞めてゆく
八尾市　香川酔々

一日を飲み干すように大ジョッキー
京都市　松川杜的

カタンカタン水を聞いてる僧孤独
竹原市　森井菁居

汚れても海しか貝に家がなく
藤井寺市　西いわを

足が出ておたまじゃくしの名が消える
京都市　都倉求芽

むき出しの棘をサボテン愛される
熊本市　有働芳仙

氷柱があるから個展見に這入り
姫路市　村上春巳

五百羅漢代表さんに供えとく
大阪市　不二田一三夫

骨揚げが調理師だった箸さばき
倉敷市　本田恵二朗

冷凍魚不動の姿勢で値切られる
大阪市　大坂形水

口銭を不労所得のように云い
大阪市　菊沢小松園

靴べらは妻の手にあり妥協癖
西宮市　若本多久志

養殖のいかだ動かず初春の海
八尾市　西尾栞

筍のぬけがらというくくり縄

★

竹原市　生信笑子

モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる
島根県　榊原秀子

空白の欲しさが草をむしらせる
大阪市　阪上十止庵

ひと眠りしたら小さな欲だった
島根県　錦織文子

葉桜よこのすばらしい息づかい
岸和田市　福浦勝晴

春風がトイレの窓からこんにちは
鳥取市　近藤秋星

冬来ると信じてスキー並べられ

大阪市　岸本豊平次

野仏の顔にも昨日と今日があり

守口市　野呂杜月

バスに乗り遅れてよかった花を見る

和歌山市　樫村ふみよ

尼寺の花気がねなく赤く咲き

今治市　今井松花

セールスの口見ていたらしゃべり止め

今治市　大本バット

おでん鍋汚れておでんらしい味

大阪市　小谷葉子

地の果ての小さいちさい塔きずく

竹原市　生信笑子

さっそうと歩くバッグ開いていた

和歌山市　垂井千寿子

脊かれた日も何気なく化粧する

堺市　羽田一扇

接待を終えて茶漬を食べなおす

竹原市　三宅不朽

足もとを視つめ私が恐くなり

今治市　原田輝親

本心を隠す刺繍の針を刺す

岡山県　嘉数千代香

昂奮したわたしへ遮断機が降りる

島根県　志賀美栄

慟哭の肩に微力の手が迷う

大阪市　江城修史

柳友逝く日巷に人は満ち溢れ

奈良県　岩井本蔭棒

悪党の霊前に花美しい

大阪市　堀口欣一

何思いけん女房のペン習字

姫路市　大原葉香

土のない暮らしの人の冷たさよ

松江市　村松酔歩

捨てた村へムチ打症で舞戻り

島根県　堀江芳子

病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ

竹原市　三宅不朽

新刊書繙く思い旅前夜

竹原市　三宅不朽

こころに灯ともさんとして金魚買う

同人吟
秀句鑑賞
——前月号から——
菊沢小松園

生け花にもされずカンナの炎えにもえ
西出一栄

生け花にもされずは川柳家の目である。花は蕾の時に折るべし、花無きを待って無しく枝を折るべからずは詩人の言である、果して花本来の幸は何れの方にあるのであろうか。

合掌の二字で結んだ無心状
藤井春日

無心状の最後に合掌、社寺の寄附勧進にも合掌で結んである、礼状に同封された請求書もこの類か。この合掌人に対してか又金にか

さとう壺にはまって蟻は呆けている
岩田美代

過ぎたるは何とやらで程度が過ぎては薬も毒となる。米倉庫の鼠が米の袋に押し潰された例もあり希望もほどほどこそと知るべし。

たいこだけ聞いて祭の台所
高橋操子

祭礼に客を招く風習は未だ地方に残って居る随って台所の主婦は平素より忙しい、ゆっくり祭を見ることも出来ない、僅かに太鼓の音を台所で働き乍ら聞いている遣り切れない風習への反逆が平易な語句を使って複雑な情景を画く老練さすがに川柳のツボを心得たものと感心する。

時計ふってみるお前も疲れたか
高杉鬼遊

生活に疲れた目には時計にまで疲労感が及ぶ、時々渋滞する時計も親方同様戦に疲れた者の哀れさに見える主観的な句のよい片鱗だ

病院で飼われた鼠の不倖せ
石川侃流洞

人間がモルモットの代りにされると大層に騒ぐがモルモットには許されない、鼠の社会では問題だろうが有難いことに人間には聞えない、悩み尽きない人間の罪業がこんな事からも益々重ねられて居るのかも知れない。

バックミラーダンプかみつきそうに見え
高橋千万子

乗用車からはダンプは獰猛な怪獣に見えるダンプの運転をやめてタクシーに変った人から聞いた話では転職の当座は不安で仕方が無かったそうだ、噛みつきそうとは言い得て妙、女の方として一層感服する。

ふるさとの空気抜いてる旅枕
鈴木村諷子

就職か出稼ぎか故郷で詰めた空気枕を目的地に着いて抜く、これから初まる行動がふるさとを離れたという決意に縋がる、期待と不安が交錯する様子がよく出ている。

妥協ぐせついて本心ぼけてくる
野坂つき子

世渡り上手は妥協する、ついては、つけてであってそこに狡智さもある、ぼけてくるのではなくてぼけさせなければ上手に渡れぬ場合もある所詮世の中住み難くい、右の言葉も思い出される、ぼやっとした中に鋭さを持った句である。

食う為めに飛んでる鷗が歌になり
仲どんたく

生きる為めの生活は決して喰べる心配の無い結構な人達の想像を越えた厳しさだ、生活の空間を持て余して歌に託する程の悠長さはない、地位と境遇の違いが鮮明に出て目に泌みる。

星一つ見えぬ夜空にふむ百度
故宮地双楽

静寂の境地の夜の深さの中に百度石を踏む願望の悲壮さに何のけれんもない、赤裸々の人間性の真実が真珠のように光る。真実一路に生きて来た人のみが咏い上げる境地がよく窺える。

雑草に晴天あり

東野大八

「雑草に晴天あり」磯貝碧蹄館―「ミセス」六月号の一文を読んで、私は久しぶりにさわやかな感動を味った。

そこでこの人と親交のある清水旺夕さんに連絡して、この碧さんに関する資料があれば拝借したいと申込んだ。日ならずしてその分厚いコピーが届いた。そこで、整理を試み、これからそれを書く。

―私（碧蹄館）の実父は、晩年旅僧として相模の国円光院の門前で死んだ。山門の腰掛石の隣りには、固い蕾を混えながら椿の花がいくつか咲きはじめていた。

父は生米を食べ、生味噌をなめ、一本足の足駄をはき修験者のようであった。頬からのどへかけ、長いひげを生やしていた。ひげの中の唇がいくぶん赤味を帯びていて、赤い椿の花が咲く頃になると、私は、父が来世を椿の花に生れかわってくるのではないかと思ったりした。父は生活力がなく、私を二つの時に養母に預けて、野山を歩いた。

―一生賭けしは「肚より坐すこと」椿が父

―どぢょっ子鮒っ子寺を持たざる父を愛せ

―私の母は、終戦から数年経って、栃木県常盤村にある生家で、一農婦として他界した。

私が預けられた叔父夫婦の家に、よく薄化粧をして母は遊びにきた。

（あの人が私のほんとうのおかあさん…）

とそれとなく感じとるようになっていた。母は二度目の結婚にも破れた。少年の日の私にある種の羞恥心を抱かせたその美しい母がこうまで変り果てた姿になってしまうのか、私は母の骸の荒れはてた手を合掌させてやった。私が青年になっても、母とも子とも呼びあえなかった。

―芽ぐむ山山膝で旅する坐棺の母

―石炭は重き馬鈴薯よ母去り行く

この句は、私の句の師、中村草田男先生の作品である。それを私の書道の先生が書いて特選になったのだから、私は自分ごとのようにうれしかった。これは喜劇の王様チャップリンが七歳、その弟が六歳のときに、ある日母が、満面に笑みを浮かべながら、兄弟の手に「さあ、お前達、おなかいっぱいにポテトをおあがり」といって、石炭のかたまりを渡した。そのとき母は既に狂人になっていたという俳句である。母の愛と、作者の深い人間愛が二重になっている。私は書の題材に、この詩句を選び先生に提供したのだが、チャップリンの母のイメージの中から、私は二歳のときに生き別れした私の母を、ひそかにそこから呼び戻していたのかも知れない。だから展覧会場で、この馬鈴薯を渡してくれた母の前に両手を下げていつまでも私はたちつくしていたのである。

―甘き冬空右手に母が箸持たす

―私は奉公に行くことになった勉強が嫌いなのだから仕方がない。金物屋の小僧になったのは十三歳の春である。（ここで小僧になっての苦難のあれこれが述べられたあと）私はここで小さな体で社会学を学んだわけだが家へ逃げ帰りたかった。正月の十五日がくると主人の許しを得て親もとへ帰れる〝やぶ入り〟である。眠れないほど嬉しかった。

―小さな鳥打帽子冬柳

―藪入りや母より厚き掛ぶとん

―私は軍隊で軍犬兵と輜重兵をした。犬をひいたり、馬をひいたり軍歌をうたった。馬でも犬でも人間より先に食事を与える。行進中の小休止には、自分より先に馬の鞍の腹帯をゆるめてやり、首筋や背中の汗をふいてやる

―戦争が終り私は荒廃した帝都に復員し、銀座の関西料理店「浜作」に養母と一緒に世話になり、板前の見習をした。正月を二回迎えガスタンクのある板橋に舞い戻った。

やがて私は街頭に出て紙芝居をはじめた。学歴のない私にはうってつけの仕事だ。コー

ルマンひげを生やし、将校用の固胴の革の長靴をはき、軍隊ラッパと一尺六寸の太鼓をトレードマークにした。子供たちにすごく人気があり、忽ち城北地区の業者三百人のトップだ。

—胸に太鼓つりゆき春の使者たらむ
—雪の画劇善人危きこと多し
—明日は元旦「黄金バット」悪に勝つ

—私は結婚した。紙芝居屋と踊り子の縁組である。養母（はは）は、私の結婚の可否を近所の神様に伺ってもらうというので、私もついていった。

私は四緑木星で、妻は七赤金星、相性が悪く大凶であるという。祭壇の火が断続するように上へ昇ってゆき、神のお告げがあった。

「天地暗黒です」

「天地晴風がのぞましく、山海は風雨強くして、あなた方のまとまりごとは神が喜びません」

私は黙って聞いていた。

「結婚をなされても早くて三年、遅くも五年、あなた方のどちらかが神罰を受けます」

私達は神に反抗した。私が二十八歳、妻は二十二歳だった。

神のお告げは的中した。結婚して六年を経て妻は神の懲罰を受けた。しかもそれは長男が誕生日の夜であった。

先天的な奇型気管と、肺と肋膜のユ着のため手術は七時間にわたった。吸入マスクをして運ばれてきた妻を、私はただ看護婦の肩越しにしか見守るほかどうすることもできぬ。懲罰を与えた神に私はすがらない。私は心の中に棲む私の神に許しを乞うのだった。

—導尿終えし妻が低声「月がきれい」

—吾子歩み馬鈴薯の花喝采す

テレビの普及というよりも、私は妻子のため、青空小劇場に終止符を打つことにした。王子郵便局の臨時集配人になったときは、もう三十歳を幾つか過ぎてしまった。日給二百七十円はまぎれもなく再出発の私そのものの能力を現わしたバロメーターで誰も恨むことはない。ただ頑張るのみであった。妻の病気は、本採用の歓喜の中であった。

—一日も職場を休まず局と病院を往復した
—髭のルーラン雪の空ゆく吾は地を行く
—妻居ぬ元日夜風が長い長い帯
—寒燈や誰が欠けても傾く家

私にこうした題の五十句に〝角川俳句賞〟が与えられた。私は飛び上って喜んだ。

私は昭和四十一年に第一句集〝握手〟を出した。それが続いて〝俳人協会賞〟を受賞した。

ある日、郵政省の曽山事務次官が、私ごとき者の書いた俳句を次官室に飾られているのを知り、私はその身に余る光栄をおそれた。

—年賀完配われ日輪に相対す

の句で曽山次官は本省の機関誌にこう書かれた。「私を色紙のこころを自分の心としたい」

—天高し眉間をまもる郵便帽

私は妻を愛し子を愛し晴れた日も雨の日も愛さなければいけない。そして郵便箱に敬礼しなければならない。

私はこの春、永年住み馴れた東京の板橋から、埼玉の浦和へ一家を挙げて移住してきた東京では滅多にみられない、馬がいるのである。昔軍隊で、軍馬と苦労をともにした私が（午）どしの妻を見つけて、午どしの子供を得た。樹間に馬の点在するところへ引越してこられたのもまことに不思議だが、私はその小さな棲み家を「馬裸絵亭（バラエテイ）」と名づけたのである。裸一貫のこころを忘れないためである。私はへたくその字で、近作を短冊に書いた。

—打てば音する馬の厚首くくり桑

風が吹くと樹木が騒ぎ、馬のたてがみがなびく、すべての物象と言葉を交しながら、私はいっそうその真実に触れたいのである。

以上で郵便夫ルーランの碧蹄館の準生涯の波乱の人生が一まず終るのであるが、私は伊古田伊太古氏（東京）から、かっての日、川柳人碧蹄館のあることをくり返えしきかされてきたものである。川柳人碧は、いま俳人として着々としてその実績による地位を築きつつあるのだが、私は柳俳一如の観点から、人間碧の逞しい人生敢斗譜の真実をそこにまざまざとみる想いがする。短詩型の真実には柳俳の句別はまるでないのだ。健全明朗、与えられた人生への真摯な情熱こそが、人間詩の真髄に通ずる—そう想うわけである。郵便夫ルーランよ、妻子とともに多幸なれ。

近作柳樽

島根県　榊原秀子

夏終りいとしきものに髪を梳く
絵心へ柿オレンジに染まりゆく
サルビアの赤へうずきのなお激し
球根へ花咲くまでの夢を積む
よろこびを抱く手は虹の色に見え

島根県　錦織文子

落葉焼く煙へ思い出添えて焼く
帰省待つ色づく柿の独りごと
縫い急ぐ晴着へもくせい乗って来る
娘の見合い愛の証しを遠く見て
病む母の手のぬくもりを抱いて去ぬ

東大阪市　坂東靖子（若芽改め）

ふるさとへ十八年目に
ふるさとの空気は恋しい乳の味
暫らくですお地蔵様も年を取り
十三年目に退院
退院へまだ安静がついて来る

川村好郎選

エプロンを掛けて母の座取り戻し

島根県　堀江芳子

労わりを稼ぎ疲れた夫から
澄みきった義眼欺く光り持つ
信じきる明日へ心の灯を燃やす
賞められた日もあり紅葉踏まれても

松原市　守屋万竿

曼珠沙華地獄に堕ちる色で咲き
天才ときめてカタコトうれしがり
子の論理筋が通って腹が立ち
背徳の心は黒か雲低く

大阪市　阪上十止庵

生きている自覚まともに陽を浴びて
健やかな六十路余生という勿れ
ありあまるとは他人様が思うだけ
長女結婚
さよならといわれてよその嫁と知り

大阪市　黒田真砂

片棒を担ぐ気話に乗ってくる
子の忠告甘い心に突き刺さり
ピンクのシエード点けて女の生きる部屋
亡母を恋い雲の階段夢に見る
青森県　波　ただお

サルビアの最後のあがき紅く燃え
髪長くしただけ勉強してくれず
嫁衣裳適令期の胸を射る
日本人も陛下の素顔見たくなり
尼崎市　中　谷　利　美

無理矢理に飲ます日本のエチケット
好きだとも言わず聞かずに添うた仲
眼に見えて酒量が減った夜の不安
ブレーキが社長自身と気がつかず
藤井寺市　古　結　百　水

敬老日働く老いを嬉びぬ
お天気が良ければ良いで妻の愚痴
お変りもなくてはとひとの白々し
スンナリと再会出来る年令になり
東大阪市　落　合　思　月

妻のメモ通りに留守番飯を食い
天職と信じた親子の光る鍬
母も娘も乗り気相手はふり向かず
老妻の美徳じっと耐えて居る
大和郡山市　森　田　カズエ

水に流した筈が眠れぬ夜を過し
涙管がつまったような悲しい日
松茸を買う人の顔横目で見
待ちかねた柳誌こわごわ封を切り
岡山県　嘉　数　千代香

明日の構図描くコンパスの輪の中で
農政が揺れてる沼がただ広い
すみません素直に云えた空の碧
子と共にわたしも母として育ち
橿原市　岩　井　本　蔭　棒

掃除したばかりの耳に小言聞く
栄転の友へ今宵の酒酔わず
金のあるところへ金は行きたがり
陣痛の呻きへふがいない男
島根県　安　達　潮　音

つばくろよまた来る春へ吾れも生く
老の意地世をせばめると知りながら
疲れ寝の妻の細りの足いとし
あかないでとは嘘になる妻といる
今治市　原　田　輝　親

濃く淡く霧は心の層を見せ
指染めし紫蘇の色ほど残る悔い
年寄らぬ事もさみしや夫婦雛
百舌の声秋の心を呼び覚まし
八尾市　高　杉　千　歩

三本の松茸家中秋にする
イメージチェンジそうですめがね買う
心解け虫の語らいきく夜なが
京の秋きものにしたい色ばかり

八尾市　高杉力

お目当ての娘は帰省中喫茶店
ギターなどひくから悲しくなるんだよ
吹き抜ける風に未来をきいてみる
北風に別れ言葉をせかされる

大阪市　小谷葉子

倖せなあなたのリズムに歩るかされ
枯葉舞うて奇跡を待っている
遠い日のコダマに微笑とりもどす
ファッションショー（新大阪ホテル）
夢いだくファッションショーの中の顔

長崎県　光武弦太朗

釣竿の先きさざ波の伸びちぢみ
電話また電話　医師とて生ま身です
珍友へ棚の奥からナポレオン

岩国市　村井酉合

どちらへも行きたいような別れ道
考えるだけの自由をいとおしみ
迷いつつ詫びつつやはりマイペース

竹原市　三宅不朽

漁火の窓の深さよ誰も来ず
種を蒔く土の匂いを抱いて寝る

大阪市　柳原静香

残り香を惜しむ着物のこむらさき
献立を決めて楽しい市場かご
昼寝ぐせ医者の言葉を楯にする

守口市　岸本豊平次

お見舞いも軽々言えぬ吸入器
日曜大工載せてよいかと念おされ
打たれても打たれても出る釘になれ

羽曳野市　麻野幽玄

いいほうに解釈をして受ける酌
遅れ来てもう選り好み出来ぬ席
云いわけになるから不義理だまっとき

羽曳野市　大峠可動

闘病の過去がまつわる身のまわり
慕情ひそかに口笛と散歩する
美しい期待へ僕と太陽と

愛媛県　小笠原仲美

平安な老い小魚の骨せせる
いざこざを逃避の老いへ菊盛り
巳惚れをここまで落ちてまだ棄てず

鳥取市　有田鹿の子

開かざる花精一ぱいに生きつづけ
秋晴れに子に誘われた砂丘踏む

子の足へ追えぬ寂しさふと思い
岡山県　山田止水

帰省せぬ子を諦らめた祭酒
招かざる客も予定の祭酒
飲めぬのが提げて来るのも祭酒
鳥取県　林露杖

燈台の光　無月の海を掃く
今日からのパート口紅薄くさし
いたずらの種がきれたかねてしまい
大阪市　河原林比呂路

秀才のあせり汚職につけこまれ
正面から見れば金魚も三枚目
偏屈も職人ならこそ通りもし
兵庫県　高橋近江

お見合いをすませて句会へ馳せ参じ
頂いた染筆家人へも誇り
秋納も終り一日わたしの日
島根県　栂みどり

秋の陽がめぐるベツドに病みつづけ
さからわず心の裏にうけとめる
虚勢はる心に涙のおちる音
島根県　東原福子

老を知る夜なべの針に虫すだく
虫熟の柿がむなしい音で落つ
むせび泣くコウロギ病人のグチに似る
東大阪市　藤田飛鳥

信じ合う仲が邪心を許さない
断絶を逃れた旅の青い空
昇る陽に今日ある事を信じきる
鳥取県　両川洋々

折れるとこ折れて夫婦の和を保ち
大声で叱る主治医を頼り切り
大安もやはり霊柩車が走り
新宮市　川上久司

いつからかあくびに蓋をしなくなり
本心を書けそうペンを持ち直す
不満ぶちまける手紙がまとまらず
豊橋市　鎮浪翠月

台風の進路へ標識のほしい国
いつみてもお若いですネと皮肉
定年へ働く意欲を無視される
小松市　村井城南

一日の始めかたさをほぐす腰
良い天気患者もはずんだ声で起き
握力の弱さペンまであざ笑い
宿毛市　山本窓花

女房に朝寝仕込んだ電気機具
腹の中透して見せたいその誤解
借金の片棒かついだ日を悔いる
和歌山市　樫村ふみよ

ノースリーブにふれた夜明けの風も秋
ニクソンのひと声地球ゆれ動き
守口市　野呂杜月

幼児をあやす少女に見る母情
生後三月抱けば泣き止む術覚え
一筋に走れぬ心悔ゆる日よ
堺市　栗本藤持

わが子とてにくらし長髪サングラス
凧糸の呼ぶふるさとに老母思う
囚人も待遇叫ぶこの時勢
鳥取市　藤本佳女

はじめての染髪冒険めく思い
弱視まだ夢は果てなく見つづける
亡き夫の心のにじむ文に泣き
鳥取市　藤本恵子

どこへ行くひとりぼっちのはぐれ雁
白芙蓉亡父の遺品が咲き競い
母の手にある老班をふと気付き
新宮市　大矢富子

人ごとでない失恋を聞いてやる
父さんのミスうっかりで済んでゆく
あの人も通りすがりの人だった
和歌山県　ふきあげ虎城

九州で紀州音頭を唄わされ
ご期待に答えてヌードショーの幕
ふるさとと切れて久しい祭笛
今治市　大本バット

染める髪あるだけましと羨まれ
箸重し我が手にかけし鶏料理
場違いの人見る如く蜻蛉見る
今治市　伊藤一郎

毎日が送れて殻を脱ぎ兼ねる
御厚意に戸惑う程の不仕合せ
退職後磨いて呉れぬ靴を出し
尼崎市　小林文月

孫の体育会
よいとこで撮ろうとする間に背を向け
わが孫と似たる少女を撮っちまい
八尾市　古川鶴声

四選の悪夢支援の方が醒め
菊人形水の欲しい衣裳を着け
富田林市　板尾凡吉

堪え忍ぶネジは夫婦で巻いて寝る
継ぎたした心の巾はすぐほどけ
大阪市　服部明陽軒

スラックス履いた芸者の昼の顔

本心を見せぬ襟足美しい
青森県　岩淵一星

ネクタイを妻はもてない柄にする
独り立ちすれば長男人のもの
呉市　槙田英詩

一方通行の恋へ孤独のひとりごと
狸寝かも知れない檻に身構える
大洲市　堀内暁風

親からの職一筋に生きる幸
たっぷりと墨ふくませて寿の一字
氷見市　関美子

栄転のその裏を聞く淋しい日
おごられる身は素うどんが好きと言い
大阪市　平井露芳

砂川捨丸師死去
雲の峰から鼓叩いてさらばです
盲腸のような存在ながら生きてます
竹原市　楠貞子

澄む月へ心を澄ます酒を酌ぎ
敬老の日へせめてもの便り書く
竹原市　生信笑子

コスモスの強さ嵐がこようとも
枯れ葉焼く煙が秋を深くする
島根県　大森孝華

秋晴へ嫁ぐ日近き娘と散歩
あけすけに言えば言ったで座がしらけ
新潟県　高野不二

天候も政府に味方する不作
親の型破る子供が頼もしい
島根県　中島英子

難聴の孤独を読書に支えられ
孫が来てうれしがらせて買わされる
高知市　竹崎寛

アル中の悩みとは別に秋が晴れ
秋の灯によろけそうなる恋心
鳥取市　山形春海

しみじみと知る妻の愛こぼすまい
こぼれそな倖せ抱いて早寝する
鳥取市　佐々木静泉

本当の実力神だけが知るだけか
たかが傷診せに行くのに紅もつけ
弘前市　小山内貞男

凡人でよかった日々のありがたく
墓地に咲くサルビヤ事故をせめている
香川県　西山綾子

無賃とは窮屈ママの膝に乗り

お祭は獅子と踊りの来る出費
七尾市　松高秀峰

冗談と云う事にして別れて来
夜長し運勢欄も読み終り
今治市　渡辺南奉

宮仕え黒をある日は白と言う
ペンならば詫びる言葉をちゅうちょせず
愛媛県　小山悠泉

赤潮を憎みきれいな海を恋い
友情に甘えて借りが一つ増え
大阪市　岡本まさひろ

もう六十追われるように秋陽落ち
生き馬の目を抜く町にも間のび顔
鳥取市　近藤秋星

感動の涙不審に覗かれる
さつき苗植えてまた来る春を待ち
大阪市　藤田頂留子

空しさもちょぴり添えて今日暮れる
秋というにさんまの煙のほろ苦く
東京都　宮崎美津子

残り火かきたてチンドン屋の厚化粧
紙一枚届けて人生けりがつき
和歌山市　増田めぐみ

贈られし人形にひかれ古都へ旅
いさかいの沈黙月に照らされて
岡山県　武元柳子

事故現場鳥肌たてて見てかえり
争うたことの詫しさ秋時雨
米子市　石垣花子

還暦へ大波小波なつかしみ
二伸又長々と書く母の文
米子市　増田竹馬

子育てのコツで取組む菊作り
我が余生多趣味多忙の楽しさよ
和歌山市　垂井千寿子

反抗期だからおみやげ忘れない
雑草になれぬ心をはがゆがる
寝屋川市　福富隆子

自分への言いわけ栗を買う月見
二女嫁って月見もせずにする噂
姫路市　小畑自由朗

病床吟
七転び八転び六十八転び
雲の峯の師へ地獄から手を振られ
新宮市　小林暢

老兵は消えずペンを持ちかえる

妻のすし或る日わさびのきついこと
大阪市　塩満敏

雨漏りを防いでパパの株上る
ホッチッチ白くなろうが禿げようが
羽咋市　三宅ろ亭

活けている無心の妻の背に若さ
愚夫凡婦二人でかかる老の坂
大阪市　堀口欣一

ドル・ショックここにもひびく先斗町
小綺麗にしてからうどん屋がさびれ
貝塚市　行天千代

向っ腹立てて旅行に出たものの
無二の友うばった夜半の風憎くし
松原市　玉置重人

傷心を伝言板に置いて行き
八十の母つくねんとただつくねんと
大阪市　西本保夫

平社員の眼にノンビリの管理職
気がつけば平社員のボク齢が上
備前市　武内雅堂

家出した娘にぬくい母の膝
雲と寝る青年母を信じたし
今治市　今井松花

床の間に蚊取線香がある宿屋
渡ろうかやめよか長い歩道橋
今治市　古野伶人

情念も無き寝覚めなり蚊を叩く
大布団着て蚊帳を吊る伊予の秋
鳥取市　藤本鎮也

大掃除受験の古書が捨て切れず
台風へずり落ちもせず屋根かぼちゃ
鳥取市　藤本和宏

台風の磨いて去んだ空に月
焼け跡のこげた木立に蟬が鳴き
島根県　安達小茶坊

本当に阿呆な夫婦の仲が解け
庭いじる老いは残暑の汗をふき
和歌山県　熊野渓水

ひまわりの小さい幸せ上を向く
一円の差でスーパーへ足が向き
泉佐野市　大工静子

念の入る留袖合わす今日の顔
六十路にも身だしなみですいい話
姫路市　大原葉香

予感あり電話のベルのけたたまし
事務服に着かえて女事務の顔

仙台市　川村映輝

ドル・ショック値下げの方は頬冠り
七十の坂妻子に支えられ

河内長野市　井上喜酔

値上げせず味も落さず数減らし
貫祿に押され自分を見失い

高槻市　山田スミ子

新米にもＰＰＭがある世に変り
土の無い暮らしになれて今日も無事

大阪市　本間満津子

子と心配一緒に大きくなって来る
挨拶のあとは秋刀魚大根の値

大阪市　松岡進

義理と云う立場で自分を叱りつけ
山に来て公害知らぬ顔になり

大阪市　木村浊水

孫と子に甘辛攻めの敬老日
本番の味覚の秋に物価高

大阪市　今井隼人

まだ残る白壁の故郷なつかしみ
きれいなとよくよく見ればかつらなり

河内長野市　森本黒天子

世話さしてやりたい人に病みつかれ

松山市　谷のぶお

転勤の傷を残している簞笥

東京都　古川良光

大荷物持たされている若い父

大阪市　大国たかし

ＧＮＰ素顔の日本を歪ませる

鳥取県　福田陽山

気持よく盃重ねる夜の雨

今治市　真山国彦

酒飲まず煙草ものまぬ客と居る

大阪市　鈴木生仏

菊人形今にも何か言いたそう

大阪市　広畑賛平

留守の間に丹精の菊盛りすぎ

大阪市　木村久子

世の中は変るものだか早すぎる

大阪市　花田繁子

聞き上手の亡き母恋し秋深し

大東市　岡部シゲ

過疎の村野仏に聞く別れ途

大阪市　村島秀村

四ツ橋と云えどさがせど橋はなし

近作柳樽

秀句鑑賞

——前月号から——

西尾栞

梢翔つ二羽の鳥の秘め言や

小池鯉生

鳥が出てきたが、実在の鳥である。之は多分に作者の主観が入っているが、嫌味のない主観であって下五の措辞は非凡である。尤も作者は既に句集を出しているベテランでもある。

パラソルの指図通りに漕ぐボート

堀内暁風

句意の説明は要さないが、人目のない遠い樹蔭の方へ方へと漕いでゆく派手なパラソルを乗せた一艘のボートが目につく。漕ぎ手が作者自身より、傍見者が作者であった方が面白い。こんなウーマンリブはほほえましい。

カタツムリどの子も御先祖の紋をつけ

錦織文子

蝸牛の背中の渦巻を、家紋と見たてたのは流石川柳人である。作者の名前を見て、女性だと驚くと同時に、成程と思う。どの子もという言葉で、生まれたてのあの小さい可愛いいカタツムリが目に浮かんで微笑を禁じ得ない。愛情を以て、ものを見た時にこんな楽しい句が出来るのであろう。

逃げるまで待ってる肩の赤トンボ

山田止水

この余裕が大変嬉しい。追いもせず勿論捕えもせずに逃げるまで待っている川柳人としての温かい心と長閑さは今様良寛さんである。私の川柳する心は、こんな気持になりたいからである。好きな句の一つである。

はち切れる若さにホットパンツ堪え

谷のぶお

パンツ堪えはうまく言い得ている。川柳は下五が生命である。はち切れる若さにという言葉で、チットも醜悪な肥満体を想像させぬところ誠に上手なり。

親子してまだ漱石は読みつがれ

藤本佳女

戦後間もなく、漱石ブームだったが、今尚続いている。良いものは良いで、何時の世になっても、漱石文学はすたれない。所謂命ある文学である。おそらく、誰もが本を読む楽しさを知ったのは『坊ちゃん』を読んでからでないだろうか。文豪の名は消えない。

人様に見えない色で塗った幸
一言を呑みこみ円い灯を囲む

栗井さちえ

二句組とは思えない佳句である。塗った幸・円い灯を囲む。の言葉の使い方は既に、習熟の域を脱している。そして上の句と少しもはなれていない。最近は抽象的な言葉や、特定な言葉をもってきて、木に竹をついだような句を新しい句だと思い違いしているが、二句とも読み返している中に、ほのぼのとした感情の湧いてくる佳い句である。

▼前号、坂本安代氏作は、

「ノースリーブすでに天下の秋を知る」と訂正します。

★

▼橘高薫風選で「電波新聞」の雑詠が募集されています。大阪市北区中之島三の三、朝日新聞ビル内、電波新聞大阪本社学芸部川柳係へ入選者に掲載紙呈・年間優秀作品には奨励賞。用紙ハガキに三句。発表は毎土曜日。

社告

秀句鑑賞の執筆陣に、橘高薫風編集長が参加することになりました。この新風にご期待ください。

川柳塔社

川柳五十三次（十五）

富士野鞍馬

26 掛川

掛川は日坂から一里二十九町（七・一キロ）今は日坂村も掛川市に合併されている。掛川の宿に至る前の塩井川では、「膝栗毛」の弥次郎兵衛、北八が、京上りの座頭にからかって川に落ちてさんざんな目にあう。

広重の絵に、秋葉山の鳥居が描かれているが、掛川宿の手前から秋葉道追分になっている。「膝栗毛」に

「やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり弥次郎兵へ遥拝して、

脇差の二尺五寸もなにかせん
三尺ぼうの誓ひたのめば」

とあり、ここから八里である。

秋葉山の本尊は、行基作の聖観音菩薩で、外に信州戸隠の飯綱を勧請して祭ってあるのが三尺坊である。

秋葉から左三尺帯がもて　八重人（二〇4）
秋葉道三尺程な畦を行き　三箱（一二16）

三尺は火防（ひぶせ）六尺火の廻り　苦笑（三八7）
江戸の火防も三尺で角つなぎ　株木（一三三3）

——火消しの三尺帯——

乾坂を唯三尺で御鎮め　一泉（一三22）
三尺の棒杭是より秋葉道　千之（一三17）

と川柳も三尺坊を詠んでいる。

この三尺坊というのは、信州戸隠の求法坊という真言宗の僧が、神道を得て三尺飛び上って飛行したので三尺坊といい、その弟子もまた三尺坊と伝えられている。それで天狗にしてあって、本尊の観音さんよりこの方が名高く、火防（ひぶせ）の神として普く信仰されている。特に火を使う人に信仰者が多い。

秋葉だけ湯屋は四五日先へ立ち　（四7）
仰げただ火難を守護の御尊体　鶏丸（一三10）
奉燈も春日に増る秋葉山　今人（一三22）
秋葉会江戸へ便りも月参り　一泉（一三17）

三尺のぼうで火なんをよけ給ふ　水鏡（一〇一41）

と火防の信仰を詠み、

名も鼻も世上に高い秋葉山　廿山（一五〇8）
秋葉の天狗遠州で鼻の会　帆布（一〇一31）

と天狗をよみ、

かきあつむ秋葉の額に屑はなし　鶏丸（一三6）
時知らぬ山のあなたに秋の山　玉守（一三23）

ともよまれている。

掛川宿をよんだ川柳は見当らない。

27 袋井

「膝栗毛」に、

「程なく袋井の宿に入るに、両側の茶屋賑しく、往来の旅人おのおの酒のみ、食事などしてゐたりけるを、弥次郎兵衛見て、

ここに来てゆきゝの腹やふくれけんされば布袋のふくろ井の茶屋」

と戯作している。

掛川から二里十六町（九・六キロ）。広重の絵には、のんびりとした田園風景が描かれてある。

28 見附

見附は、袋井から一里半（五・九キロ）。現在は磐田市になっている。建治（一二七五―七）の「十六夜日記」には、

「遠江見附の国府といふ所にとどまる。里あれてものおそろし。かたはらに水の江あ

り、

たれか来て見つけのさとときくからに
いとどたびねぞそらおそろしき」

と書いてある。昔は寂しいところであったらしい。「水の江」は天龍川のことであろう。

見附の西を流れる天龍川は急流で渡し舟であったので、広重も渡し舟の絵を書いている。渡ったとこが中の町といって、ここから江戸へも京へも六十里（二四〇キロ）であった。

天龍川のほとりに池田というところがあり、ここの長者の娘熊野（ゆや）は、平宗盛の寵をうけて京都に居たが、清水で花見の宴のなかばへ、池田に在る母の危篤と知らせられたので、

いかにせん都の春も惜しけれど
なれし東の花や散るらん

と詠じて帰国を許された。という物語は、謡曲や長唄にもなっている。

人参を食べますそうと熊野なげき
（安九義2）

小便という場を熊野は歌をよみ
鶏助（一〇八22）

よい時分ひっぱずしたは熊野御前
（拾五25）

——小便組妾に比喩——

今死ぬと花をふらせる妾が親　（一二40）
毛氈の上から熊野はいとまごひ
（天五桜1）

運のよさ熊野六波羅を早仕舞
巨眼（一〇九17）

熊野御前なが居をすると水をのみ
（一六26）

などと川柳にも詠まれ、その時帰国しなかったら、平家一門とともに壇の浦で入水したであろうとうがっている。

天龍川の渡し賃は、明和の頃二十四文であった。ここから本街道を通らず御油へ出る本坂越えという道がある。

近詠

須坂市　高峰柳児

こん虫の定価へ明治の憤り
示談ケリついた途端に後遺症
狂ってる柱を建売り見つけられ

大洲市　米沢暁明

心斉橋通りに小学校があり
休耕田案山子遺憾に存じます
読みちがい追加したほど余りそう

今治市　月原宵明

披露宴馴れなれしくて眼をそむけ
独酌は自問自答で銚子振る
萩、芒活けてしみじみ寡婦となる

好々爺入墨してるとは見えず
この人も年か孫の句白髪の句
餅搗きをテレビで知った現代っ子

和歌山市　秋月宏方

流れ者酔えば故郷の唄になり
余燼かき立てて余生の目に逢えず

岐阜市　市川鱗魚

先生の自がささやきへ飛んで来る
雪どけの姿にも似た老いの肌
満月にならん先から欠けはじめ

今治市　長野文庫

過疎に耐えせめて岩魚の囲炉裏ばた
清流がまだ生きている鮎の膳
京の寺で人足絶えぬまま暮れる

小松市　山上千太郎

ピカピカしない

「ねっくれす」

橘高薫風

西出一栄さんの句集「ねっくれす」が、著者の六十九回誕生日の十月十日に発行になった。外来語は片仮名で表記するのが慣例であるのに、著者は敢えて「ねっくれす」と平仮名を用いられたが、成程、これで一栄さんの人柄が浮き彫りされてくるから不思議である。自分を生かす能力をわきまえておられる。文章も巧みで、自序に、「故清水白柳先生の手ほどきをうけましたのが昭和二十九年三月頃と記憶しております。それから間もなく同年八月十四日放送の大阪中央放送局川柳評課題「ネオン」の選者が清水白柳子（当時）でした。私は無鉄砲に投句しましたところ佳作十五句の中に、

道問えばネオン目標に教えられ

が、抜けていました。それから川柳が面白くなったのかも知れません。と、しますと、柳歴十八年になりますが、すこしも句は上達していません。河南高校を卒業しただけの学歴では無理もないと自分で自分を慰めているのですけれど、碁や将棋のように段がないからついて行けたものと思います。後略」とある。白柳さんが健在なら、氏の序文があったであろうが、自序だけにされた著者の白柳さんへの心の傾斜が思われて、清々しい。

女なるかや猪首にも首飾り
混浴へタオル一本たよりにし
不足ない年でこの柄地味やるか
へそくりでうっかり夫のものを買い
主治医と家族で箱入婆にされ
家政婦の独裁主義をもてあます
付添いと波長の合わぬ佗しさよ
虫の声今年も聞ける闘病記
聞き馴れのよい会名で今日も留守
嫁のセンスおしゃれな姑にしてくれる

これらは著者の身辺句である。路郎門下は「いのちある句を創れ」の下に育てられて来た。「いのちある句」とはどういう句なのであろうか。死後も語り継がれる万代不易の句の謂であろうか。それとも、己れの境涯に誠実に、その生の一瞬一瞬を大切にした句を云うのであろうか。私は現在、後者の意味であるような気がしてならない。そうとすれば、一栄さんの句は、「いのち」の充実した句であると云うことが出来そうである。

厄介なことに年子になりそうな
べんちゃらの云えない人に子はなつき
子沢山出世しそうなのも混じり
こういう句に行き当たると、路郎先生の息のかかった作家だなあと思うし、
仲人の云うた通りに好きになり
天王寺亀もあきれている人出
パトカーへ寝まきの近所揃うたり
玄人がちょっとさわればすぐ直り

これらの句に接すると、白柳さんの薫陶ぶりが偲ばれる。

批判の目も鋭い。外に向けたものだけでなく、自己に対しても痛烈である。前掲の、

句会などの賞品に、投句用に、

川柳塔柳箋

一冊六五円　送料三五円

「女なるかや」「虫の声」をはじめ
三人の子持ちでピンクまだ似合い
いつもなら叱るキャンデーママも食べ
赤旗を振れとの学資送ってず
権利金引かれ孟母を真似られず
などの句もそうである。また、ユーモアの句も多い。「混浴」「箱入婆」の他に、
真ん中に坐わり相槌いそがしく
五つ紋着て洋食の卓につき
屋上があって月見の酒が要り
来客へギョウザのように子はならび
つまみ食い背の子供も口をあき
残さん先きに繁盛してござる
役員になって会則読み直し
など、その数はきわめて多い。批判とユーモアがつきまざってこの作家の個性になっていると云って良さそうである。
シクラメン赤を並べて嫁若し
月・花・虫　野仏うれし秋の夜
平安神宮だらりの帯に似た桜
このような感覚的な句で読者を楽しませてくれるし、
表札の養子の名前に馴染んでき
手のひらへ一足のせた孫の下駄
民謡で県人会の幕があき
身に合わぬゆかたも旅のおもしろさ
心斉橋夢のつづきを見に出掛け
では味わい深い穿ちで啓発してくれる。
ピカピカしない、渋くて暖い色のネックレス、即ち、「ねっくれす」そのものなのである。
人生の余白へ残すものが欲し
の句のように、いよいよお元気で、沢山いのちある句を残されるよう貪欲になって戴きたい。白柳さんが、それに令妹清子さんも、何時も見守っておられることだろうから。

西出一栄句集・川柳塔社女性第一号句集！

麻生葭乃先生・監修

ねっくれす

送料共　六百円

発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇　川柳塔社

西出一栄さんの句集が出ました。一栄さんは故白柳さんに手引きをされて川柳をはじめ十八年の柳歴があります。
ご夫君もかっては川柳を作っておられましたが、ご自分は家業に打ちこみ、一栄さんに川柳を専念させる夫婦愛は有名な話です。
「おおらかな句を作る人」とは葭乃先生の批評です。

川柳家の暦

（十二月生まれの人）

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。（編集部）

遺稿　清水白柳

1日 大島無冠王 M34 辛丑 京都
黒髪のみだれし夜より秋が立ち

1日 河柳雨吉 M35 壬寅 東京
夜の花みんなこっちを向いて咲き

1日 羽原静歩 T1 壬子 守口
あいさつを抜いていろりの火が赤い

1日 石田清泉 T6 丁巳 島根
2日 神田福子 T8 己未 神戸
犬には犬の考えあって吠えつかれ

3日 中西柳翠 M39 丙午 高知
叱ってはみたが片親だと思い

3日 新葉美野路 M41 戊申 神戸
倖せと思い不幸と思い日日

3日 尾崎馬風 M42 己酉 高知
百米舗装残して予算切れ

3日 大高涼月女 M44 辛亥 大阪
小ざっぱりと着れば子無しを見破られ

4日 西田放亭 T5 丙辰 熊本
不遇なる詩人とやらの夜の散歩

4日 佐川清流 M25 壬辰 高知
その母の気品にもほれ見合いの日

5日 石立不折 M35 壬寅 西宮
天井に企らみもなく秋の縄

5日 田中好啓 T2 癸丑 倉敷
ある不倫たけのこの皮剝きながら

7日 渡辺暁童 M43 庚戌 愛媛
静かなる愛情灰をかきならし

7日 田中かず子 S10 乙亥 堺
足音が私に向って来る思い

7日 伊藤彩花 T4 乙卯 足利
同情の言葉の端にある他人

8日 工藤甲吉 T2 癸丑 青森
十二時に寝た母いつか起きている

8日 吉野富子 T2 癸丑 和歌山
助太刀の妻に商談こわされる

8日 中筋三幸 T9 庚申 和歌山
挨拶が長うて子供地に坐り

10日 山田蔦路 T11 壬戌 神戸
使ってくれないからと鋸錆びている

11日 川上星花 M39 丙午 神戸
視野すべて人間臭い街に住み

11日 山本宍道郎 M39 丙午 東京
花吹雪僕の命は僕のもの

11日 前馬智恵女 S10 乙亥 和歌山
情報をにぎる末席顔をあげ

12日 神谷凡九郎 T10 辛酉 大阪
啄木の見た掌もこんな掌だろうか

13日 堀風仙洞 M23 庚寅 大阪
いつの世も母は消し役灯し役

13日 浅田汎文 M38 乙巳 兵庫
夏バテの指に根強い草の息

14日 山田凡楽 T3 甲寅 新潟
鮎を焼く気げん女の手をかりず

15日 松村万古 M39 丙午 岡山
助け合い人間に差のある限り

15日 三浦宏 S11 丙子 呉
17日 田中狂二 M38 乙巳 堺
これ着て行きと仲良し服を脱ぎ

17日 竹中綾女 M40 丁未 東大阪
ぼうふらが暫く子供遊ばせる

17日 飛田好一 T1 壬子 大阪
酒だけを生き甲斐とした愚を悟り

18日 里小路 T2 癸丑 大阪
宝くじ下一桁であきらめる

19日 林一六 M43 庚戌 大阪
瓦斯ボンとついて平和な台所

20日 壱岐マラソン翁 M26 癸巳 壱岐
20日 平賀紅寿 M29 丙申 京都
ゆうべ舞妓が通った道を修行僧

20日 橋本言也 M31 戊戌 大阪
苗床に一本そっがなく芽生え

20日 原千里 M39 丙午 下関
20日 矢野十考 T7 戊午 高知
22日 佐竹彩峯 M25 壬辰 呉
俎板の西瓜転げたろかと思い

22日 栗原花車 M26 癸巳 岩見沢
長話切れ目に熱い燗がくる
22日 佐々木鳳石 M40 丁未 名古屋
高原の母娘都会を羨まず
22日 中田和泉 T5 丙辰 高知
お人好し又催促を云いそびれ
24日 小松原爽介 T11 壬戌 神戸
落葉手にいとしむ日あり街に住み
25日 菊沢小松園 M37 甲辰 大阪
雑音の一つとなって今日を生き

十二月

不二田一三夫

場末の映画館で売店を経営していたころ、十二月も押しせまったクリスマスすぎに来る観客のほとんどは借金を逃げてきた人のようにおもえた。ヒルに入ってきて、売店のあんパンとラムネでバレまでねばるのだ。閑古鳥のなくガランとした三流館の師走風景はわびしいものだった。

師走の北風は貧乏人にはきつい。ぼくもそろそろ貧乏とも手を切りたいものである。

★西日本新聞「暮らしの百面相」から、十二月のある日を読んでいただこう。

十二月親にみじかく子にながし 川上三太郎

きょうスタートする十二月。しわす、とも呼ばれる。しわすは師走。この月になると、日ごろは落ち着き払って貫録を示していた先生でさえ走りだす。というわけでむかしから一年のさいごの気ぜわしい月、と決まっていた。公私ともに多忙を迫られるこの月——

おとなにとっては、もっと時間がほしい、というところだが、こどものほうは『もういくつ寝るとお正月…』のあの小学唱歌のように、正月を待ちわびる月である。

なにかいい気味に師走の昼を酔い 佐藤正敏

昼酒の酔い心地をうたったこの句。かえって十二月のあわただしいふんい気が感じられるから妙である。体験句なのだろう。作者は『川柳研究社』の生みの親だった三太郎氏の死後、同社の幹事長をしている人。師弟による十二月の句をならべてみた。

×

速達で電話をくれと十二月 船迫 勝彦

十二月の句を、また取り上げてみる。川柳には、ほかの月に比べて十二月をよんだものがなかなか多い。暮れのあわただしさにふれた句の多いのは当然だが、この作品などはその代表ともいうべきものだろう。急ぎの用の多いこの月のふんいきが、よく出ていると思われる。

その上に謡の会も十二月 生島 鳥語

忙しい月だから、昼寝をするにしても、

十二月時間を切った昼寝する 椙元 紋太

酒を飲むにも、

十二月首だけ入れてのんで行く 麻生 路郎

ということになる。夜は夜で、

子がみんな寝てから話す十二月 磯部 鈴波

金銭関係など。夫婦のあいだに相談ごとが多いのもこの月である。

耳垢を取る暇がある十二月 井上 柳志

はこの多忙さを、正反対の面からうたったもの。

十二月凡人ここに来てあわて 秋月 宏方

（小泉戸牟）

25日 地黄天国 M44 辛亥 大阪
26日 河村露村女 T1 壬子 伊丹
今日のあるかげの力を恩と云う
26日 山本芳伸 M42 己酉 徳島
27日 正木竜樹 M21 戊子 金沢
正札もまけたでうそつき札になり
27日 五十嵐さかえ M41 戊申 埼玉
しぶ柿の明日をあせらず年を越し
27日 藤原みてい T9 庚申 京都
交差点都会の夕陽落ちるとこ
28日 小田無限 M38 乙巳 福岡
大器晩成なるほど大酒飲みとなり
29日 岩戸迷羊子 S2 丁卯 室蘭
愚に徹しきれない若さ孤独に居
30日 大橋時子 S15 庚辰 東京
赤福のみやげをくばる伊勢帰り
31日 吉川亜人 M25 壬辰 山口
電報に猫は膝から落される

▼本号で白柳さんの遺稿をおわります。本稿から洩れた方にはおわびいたします。

和楽居士・双楽さんを悼む

八木摩天郎

深みゆく秋、ひとしお、寂しい十月廿九日午前二時半、念願の「和」の色紙一千枚揮毫もおわり、全国に頒布は達成したが、なお今後和の道場を建設するんだと叫び続けて死んだ柳界の変り種、宮地双楽さんが府立病院で七十五歳の人生の幕を閉じた。本名は末吉。法名、真帰禅光院和楽寿仙居士は生前から附けていた。十月廿五日、私が病院を見舞ったら、死を覚悟してか、いよいよ〃私も終点に来たと云って〃淋しそうだった。川柳塔座右の銘、私の句に

堯・舜にまさるうれしい子の善意　双楽を私にメモさせた。遂にそれが最後の別れにならうとは。

双楽さんは梅里さんに勧められて川柳に入り梅里さんの附けた〃双楽〃の雅号を、この上なくよろこばれていた。梅里さんと一緒に、堺成人学校川柳O・B若芽川柳会に来たのが初対面だった。私とは大学は異っても大正十二年組、眉ひいでたる「するが台」の卒業時!!関東大震災の巷の混乱に暴漢を叱咤する勇猛振りなど、さすがに、土佐産まれ。よく坂本龍馬を語り、戦前、戦後実業界での買い出し接衝や、学友の明大学長との学長室での談話等、話題は常に豊富だった。夙に聖徳太子を奉讃し、色紙に「和」の字を揮毫して一千枚、全国に頒布して和の精神鼓吹を願とし、遠く他府県に出張し、頼まれれば揮毫もし、講演もされ、私も一緒に出掛けて信楽焼窯元で揮毫もし、寺に宿泊して枕をならべた事も今はなつかしい思い出となった。和の道場を建設したい悲願であったが、病いには勝てなかった。全国に亙る「大法輪」と云う宗教誌を永年愛読せられ、同誌に川柳欄のないを不満として提唱し、川柳の社会進出を計ったその君の功績は大きい。提唱が採決され実現のよろこびを告げる電話。「それはよかったネ」とよろこんで受話器を伏せた白柳さん。それは、おそらく全国柳人中の電話で白柳さんの最後の電話でもあった。

話す双楽、話を聞く白柳、今やその人たちは今は亡し。秋が一層きびしい感がする。入院前、自宅に双楽さんを訪えば、死を予見していたのか、夜を徹して随筆に執筆し、纏めて床の間に積み重ねてあったのには驚いた。お子達から病いが重くなる、重くなるとのアピールも聞かずに……子孫に残すのだ。意志を伝えるのは文筆のみだと云っていられた。その随筆を手にして見ると、宮地家由緒書、聖徳太子奉讃、和の精神の根本義等、昔から和漢の書を弘く読み、哲学、宗教、社会等各部門に識見の程をのぞかせていた。私も時たま双楽句に哲理から生まれた川柳句のある事は知っていたが、聖賢の教を守り抜くと云う心がまえの持主でもあった。

双楽さんは終世川柳を愛好し、川柳に生き甲斐を覚えていたが、曩年、ご長男の死はショックが大きく身も弱られた。しかし、私の句碑に関しては、生きているうちにと趣意書企画書、日記など遺品から発見して、私は目頭があつくなった。柳友として私を思う情に胸打たれる思い。今後の活躍を願う君が、堺・若芽にもう来ない。南海・富柳会・南大阪、殊に大萬川柳会蔭の立役者双楽さんの姿が大萬川柳会から消えたのは惜しい。心残りでもある。合掌。

双楽句抄

小さくとも我が家に誇り和の光
偶像があるから信者寄って来る
戒名もつけて未来へ手をかざし
ふる里に墓来も絶えて二十年
世間虚仮叡智の太子のたまえり

幸福な余生に子等の和のコンビ
往復の切符もてない人生譜
死ねばみな元素にかえるだけかしら
聖賢の古智見習って夢生かし
　星一つ見えぬ夜空にふむ百度

▼宮地双楽追悼句会―十二月十八日（土）午後六時から八木摩天郎氏宅で開催。題―和・ふる里・夢・星。（双楽氏の生まの声をテープで聞いていただきます。）―堺・若芽合同句会

双楽さんさようなら

河内天笑

双楽さんは賑やかなお葬式をのぞんでおられたようです。そんなわけで各柳社の方々もたくさん参列されました。

川柳塔からは生々庵主幹をはじめ、栞、小松園、文秋、柳志、摩天郎、あいき、鬼遊、酔々、史好、青香、謦二、草春、一二三、柳太、葉子諸氏にぼく。大萬からは克己氏、弔電は四十五通もありました。八木千代さん、林瑞枝さん、石垣花子さんなど、双楽さんの人柄がしのばれるものでした。

式のあと故人の希望で川柳人間だけで座を囲むことになり、料理は大萬の折詰めずし、松茸フライの美味は、双楽さんの味のように香りゆたかなものでした。

閑谷黌

香川酔々

この春、久米雄建碑川柳大会の日、生々庵主幹、好郎先生、栞先生、葉子さんほかの方々と閑谷黌を見学しました。風来子氏や好啓氏からその由来など聞かせてもらいました。

講堂に座す幻の先哲ら
椿山亭椿を愛でし名君と知る
鳴竜のような舛に耳を貸し
石の炉に三八銑の油あと
石塀に草を許さぬ庭師の智
石柱は贅つなぐ石　贅置かず
萬緑に輝る甍は備前焼
萬緑の景に閑谷黌溶けて
松の芯伸びて鳥城を持ち上げる

▼同人消息▲

▼尼緑之助氏、弘津柳慶氏、原独仙氏など出雲同人が山陰テレビの〝いずもまつり〟に出演、十一月六日に放映された。

▼垂井葵水氏（和歌山同人）は和歌山文化協会主催の十月二十八日からの美術展に「わりきったはずの掟を越えてくる」を色紙に麗筆をふるって参加、好評だった。

▼野村太茂津氏（和歌山同人）は十一月一日から夫人滞同で東京から信越へ。

▲岡村久志良氏（岡山同人）は遺族会のお年寄りを引卒して秋の山陰路へ旅をされた。

▼本多柳志氏（大阪同人）は家族連れで出雲路へ―宍道湖の風が冷たい宿浴衣―柳志。

▼浜田久米雄氏（岡山同人）の電話番号が変更―〇八六九八四―二二四九番。

▼横山一声氏（岡山同人）宅は―〇八六九八四―二三六五番に変更。

▼直原七面山氏（岡山同人）電話開通―〇八六七三二（弓削局）二七〇八番。

▼小林孝正氏（新居浜同人）は肺門切開及び胃の手術のため目下入院中。

▼小出智子さん（大阪同人）も入院中のところ十一月初旬退院。

▼飯田一治氏（八尾同人）は**悦郎**と改号。

▼句会案内▲

▼東大阪市川柳同好会―十二月十一日（土）午後六時。会場―近鉄永和駅南、中央公民館第2集会室。題―埴輪（はにわ）裏通り・雪山・ストーブ。会費―百円。投句のみは十五円切手四枚。投句先―東大阪市下小阪七の十一竹中肖二宛。

▼川柳塔八尾支部菜の花句会―忘年闇汁句会―十二月十二日（日）午後二時。会場―近鉄八尾駅下車、南へ百米、商店街途中右折突き当たり（八尾の天神さん）会費―二百円、他に食べられる材料（百円見当）持参。題―鍋・商店・男前・大。

▼南海川柳会―十二月十六日午後六時。会場―南海電鉄本社食堂内。題―中古車・やせがまん・相性。

▼南大阪川柳会―十二月二十日（月）午後六時。題―口添え・掃除・手酌・杖。会場―松崎町二丁目、以和貴荘。

金策

都倉求芽選

金策をかねた娘の里帰り　翁童
金策に新大阪を発つ師走　洋々
金策の上目使いに親を見る　隆子
金策のベテラン通用門から来　輝親
金策の主は女将の秘中の秘　暁風
金策をしたとも知らず鈴の下駄　初甫
金策ができて予約を催促し　止水
退職金はじいて金借る枠を決め　秋月
金策の涙と妻はすぐ悟り　敬一
金策ができて内輪の式をあげ　思月
金策の頭の中の五ツ玉保夫
マダムから金策の知恵教えられ　暁明
金策に来た顔色を母見抜き　鎮也
金策がつかず逃れた詐欺の牙　佳女
金策の見込みが崩れる時が経ち　新之助
保証人嫌とは言えず印をおし　陽山
金策を女に委す手も覚え　いわを
金策と見たのか予防線をはり　不二
金策の妻へも無言の日がつづき　秋月
手をひいて背負うて女借り歩き　宵明
金策の帰りに嫌な奴に会う　秋月
金策に家宝の軸そっと出し　三十四
大口の方はすらすら借りている　国彦
金策に走る外車と見てくれず　利美
工面した金の重さが計られず　干翁
身から出た錆金策にさいなまれ　軒太楼
金策となると無能なお坊っちゃん　暁明
金策の無理あの頃は若かった　仲美
金策がついてそれからのし上がり　恵子
銀行から帰った夫の晴れた顔　誓二
金策のコツも覚えて角がとれ　白汀
あらたまり他人行儀に金の事　貞男
金策に行くのに見栄が捨て切れず　一郎
胸算用した金嵩に程遠く　葵水
金策に馴れず前歴だけ光り　潮音
金策の先々ニクソンでことわられ　百水
金策考え考え競馬欄見てた　古方
恥捨てて来た金策に錠がおり　軒太楼
金策に来てる先まで電話くる　木魚
進策に母は金策嬉しそう　佳
貫録を示せば金策頼まれる　露杖
金策のうまい男の破産癖　鎮也
もし有れば叩きつけたい金も借り　綾女
急行で来たが金策切り出せず　梁水
金策の見込みも切れて置く受話器　魚山
貸す肚と知って意見が身に泌みる　人
兄弟の仲でたやすく金ができ　地
金策と別に赤字線今日も　天
　　軸
　　陽山

喪中につき、年末年始のご挨拶を欠礼させていただきます

河内天笑

実力

浜野奇童選

実力の有無を言わせぬ東大出　代仕男
七光りなどと実力見てくれず　どんたく
先代の実力二代目小さく見え　逸名
実力があるから押せる横車　カズエ
実力をためしてしんがりから攻める　千翁
実力テスト勉強不足を叱られる　恵子
奸臣がいて実力を封じられ　春日
実力と別にお金が意地を張り　春海
実力を振る学生の平和論　止水
実力は黒の上司へ二目置く　敬一
実力を金の力があわてさせ　南奉
ペチャクチャと実力のない喋りう　暁明
実力の差は争えぬ廻り椅子　竹馬
実力へ成田不動の加護もかり　宵明
心にもなし金力にひざまずき　宵明
実力は兎に角美女として知られ　仲美
実力ですなあと他人さまがほめ　千翁

正門をいつも閉じてる実力者　伶人
実力を出しきりましたさわやかさ　一郎
実力で坐った椅子がぎこちない　新之助
点数には触れず実力賞めてやり　静泉
そんなとこに実力の芽がでてたんや　古方
裏門に実力煮え湯飲まされる　本蔭棒
新任の課長に実力伴わず　七面山
実力を出しきれぬのも親ゆずり　とみ子
実力を言えばふさいでばかり子の　隆子
実力が火花も散らす営業課　章雅
実力がむなしい距離を作ってる　葵水
実力に勝ち倖せに縁がなし　鎮也
実力を買われ僻地へする赴任　孝華
運が悪かったと実力にはふれず　洋々
実力のないのが寄って多数決　バット
ライバルに花をもたせているゆとり　千代香
実力の差ばかりでないうらばなし　敏佳
実力があるからゆっくり走り出し　白汀
実力の差を惜敗と地方版　松花
実力に差あり笑顔になっている　千翁
駄馬は駄馬なりの記録へむちをあて　梁水
コツコツコツコツ実力が物いうなり　古方
人
実力を拳の中に貯える　静歩
地
どの辺で抜こうか二番目を走る　千代香
天
実力をチラチラ見せているピエロ　久司
軸
成行きをじっとみていた実力派　伶人

逆か立ち

黒川紫香選

お隣りも美容か逆か立ちへ夢中　暁明
逆か立ちの孫へ介添二人いり　軒太楼
酔えばすぐ逆立ちしたくなる男　里風
逆か立ちも教育ママとして習い　扇水
逆か立ちの富士を見て来た五湖めぐり　初甫
逆か立ちの稽古下から苦情来る　本蔭棒
どう見ても逆立ち出来ない人でなし　七面山
逆か立ちの眼に空はこんなに美しい　古方
逆か立ちのほかには芸のない課長　春日
逆か立ちをしても名案湧いて来ず　静歩
子煩脳逆立ち見せる若い父　暁風
美しくなりたい逆か立ちやっとでき　新之助
ショートパンツ逆か立ちもするお嬢さん　藤持
声援を受けて逆か立ち歩き出し　代仕男
逆か立ちをした可愛いいへそが見え　杜月
恥じらいもなく逆か立ちをする娘　祥月
逆か立ちの芸者へチップが高くつき　三十四
人形は逆か立ちにされ脱がされる　木魚
逆か立ちの写真逆かさに見てる母　翠月
逆か立ちをすれば越後の海が見え　輝親
逆か立ちで屋根の上から母を呼び　伶人
逆か立ちがすっきり伸びて拍手され　松花
逆か立ちの男一匹出初式　国彦
逆か立ちが上手に出来るスラックス　一郎
逆か立ちをすると長屋はすぐひびき　保夫
うれしさを子は逆か立ちをして示し　洋々
逆か立ちをしてから社長に覚えられ　ろ亭
逆か立ちをしても個性が捨て切れず　静泉
逆か立ちで地球支えているつもり　白汀
逆か立ちの上手なパパとママと僕　通雄
吉報へ老いも逆か立ちしたくなり　梁水
逆か立ちをして見せますと買い言葉　葵水
横暴な社長逆か立ち出きるとは　とみ子
逆か立ちも苦にはならない美容法　利美
たしなめた母も一緒に逆か立ち　隆子
逆か立ちが出来てしたがる女の子　暁童
逆か立ちを妓にさせて悦に入り　古心
逆か立ちで歩きたいような嬉しい日　秀峰
参観日娘の逆立ちも見て帰り　佳女
自慢して家中逆か立ちして回わり　和宏
人
逆か立ちの足跡二つある裸宵　明
地
逆か立ちへ孫と一緒に叱られる　春海
天
逆か立ちへ小銭が派手な音をたて　素身郎
軸
逆か立ちの顔へバッタが来るも春

★

▼十月号の「黙秘権」を「黙否権」と出題採用そのものから間違い、よそからいわれるまで気がつかなかった不明をおわびします。

編集部　不二田一三夫

初歩教室

——題「白」——

本田恵二朗

白黒で競いあってる囲碁の客　隼人

早や雪が富士に積って初化粧　同

説明句の見本である。描写性が薄いからである。十七文字で説明しただけで、川柳であると簡単に、安易に思い込んではならない。説明調を脱出できない間は、まだ本当の川柳人ではないと私は常に言っている。脱出するための血みどろの苦心と努力があってこそ上達の軌道に乗ることが出来るのだ。そして本当の川柳人になれるのだ。だがあわてることはない。じっくりと構えて、とらえた句材を三日でも四日でも練って見ることが肝要だ。そうすることによって必ずや何かを発見し会得することが出来る。サア頑張ろう。

(白い火花黒い火花の散る碁盤)

(はやばやと富士の嶺冬の化粧する)

白々とした素振り親が横にいた　軒太楼

(白々しい顔だなるほど横に親)

青春も炎も秘めて着る白衣　露杖

(青春も炎も白衣の下に秘め)

(青春が白衣の下で燃え疼き)

白足袋へ心の乱れ取り戻し　春海

(足袋白く履いて心がなごみそめ)

白足袋を脱げばオキャンな娘に戻り　誓二

一句ものしたが、その反対を考えて見ると又一句生まれることがある。試みてみよう。

(白足袋を履けばオキャンな娘と見えず)

ま白ついカンバス僕の色で染め　英詩

(僕の色で染めよう真白いカンバス)

余白をうめる定年へ職がない　翁童

(人生の余白を埋める職探す)

時間稼ぎ白々しいうそもつき　翁童

(白々しい嘘で時間を稼ごうか)

老刑事容疑者白に肩が落ち　つとむ

(白と出た容疑へ老刑事の肩が落ち)

白々と言い抜けている赤い顔　美代

(酒臭い息白々と言い抜ける)

白髪賞飛び出し級会今佳境　美代

(白髪賞まで飛び出してクラス会)

乳白にまぶされて御来光　頼次

(乳白の霧にまぶれて陽が昇る)

この家の盛衰白壁語りかけ　富喜子

(白壁がこの家の盛衰物語る)

白書ばやり不況ムードに輪をかける　保夫

(白書白書不況ムード盛り上げる)

告白の記事もどうやらフイクション　同

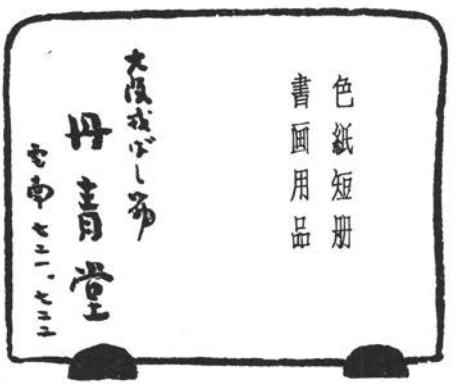
(告白の記事フイクションの匂いする)

白い手が闇にゆれてそれつきり　千夏

(白い手が闇に泳いでそれつきり)

白杖に席をゆずってその日中たのし　同

(白杖に席をゆずった青い空)



糸まるめて白い玉ができ　静観堂

(白い玉一つになった糸)

お見合の写真白黒で気に入らず　同

(白黒の見合写真のもの足らず)

白壁のどこから落書してやろか　止水

(サテどこから書いてやろうか白い壁)

表面は白紙にかえす和解酒　同

(和解酒一応白紙の貌作る)

お遍路は白白の道つづく　陽山

(お遍路へはてなく続く白い道)

白菊の大輪我が世と手をひろげ　同

(白菊の大きくわが世の秋歌う)

純白のドレス母娘の目銀のつぶ　静子

(純白のドレスへ母娘の目がうるみ)

白黒をつける気六法全書繰る　洋々
（白黒をつける気六法と首つ引き）
木綿地は洗濯するほど白く冴え　ますゑ
（木綿の宿命洗えば洗うほど白く）
色白で七難かくして羨まれ　繁子
（七難をかくして余りある白さ）
見せたいか白いお肌にお脇まで　同
（白い肌おまけに脇も見せたがり）
白菊の香りあの世へとどいてと　シゲ
（白菊の香りよ届けあの世まで）
疑いも晴れてうれしい白となる　秀村
（晴れて白となったうれしい陽が昇る）
古稀迎え白髪ないのも一寸わびし　浊水
（白いもの古稀のおつむに少な過ぎ）
乙女心白衣の天使にあこがれる　久子
（少女ふとナースの白衣にあこがれる）
白無垢で嫁いで今は雑布婆々　満津子
雑布ばばーはちとひど過ぎる。句品も無くなる。現代川柳はもっと品がなくてはならない。品の良いユーモラスな句でありたい。
（白無垢で嫁いだ明治をなつかしみ）
宿命と知らず白痴のよく笑い　万竿
手術台白衣まぶしく目を閉じる　近江
白々しい答弁堂に入り議員章　嘉明
白旗を妻が出すまでもの言わず　慶彦
白髪ちらほらまだかたづかぬ娘が二人　酉合
面白いことおまへんかはごあいさつ　敏
初老夫婦白髪抜いたり抜かせたり　洋々
白星の夢は一色十五日　藤持
共白髪どっちが先に消えるやら　賛平
花挿れて壺殺してる李朝白磁　まさひろ
白湯ですと薬飲ませた故事を真似　同
腕白で困ると見えぬ子の寝顔　利美
母だけは子の潔白をまだ信じ　同
白線のとおり歩いて事故にあい　カズエ
白砂青松故郷は空気のうまいとこ　同
白壁へ悪童の足ふと止まり　本蔭棒
あの時の白紙委任がごねに来る　同
満ち足りし女の白い歯が笑う　比呂路
便箋の余白に本心ほのめかし　同
話しかけて来そうに見える白い雲　杜月
婦長さんも白衣の影にある悶え　同
女一人生き抜く夜を白く塗り　進
白い目をむいても孫めおどろかず　同
いつまでも調書が白い黙秘権　花子
白バイを見送りスピードまた上げる　同
惜気なく花嫁白のもすそ引く　葵水
家計簿の余白鈴虫鳴きはじめ　同
白髪もう見えて慕情がうろたえる　同
どっちでもいいので白紙委任状　同
仲間にだけ通用する言葉がある。辞書には勿論ないに決っている。そんな言葉は、ほのぼのと楽しいものである。故服部十九平氏は（柳縁）、故水谷鮎美氏は（柳魂）という言葉を創作して、好んで口にしたり文章にしておられたが、これらは仲間に通用するだけでなく、生きた言葉となって、愛用されていたから愉快である。私はその向うを張る気ではないが（柳恩）という言葉を、幾年か前に創って愛用しているが、PRが足らぬせいか、愛用されるところには至らない。それは一向に構わぬことだが、時々それを用いてくれる友に出会うと悦に入るから他愛もないことだ。そこで（柳恩）なるものの正体を、駄句を並べることによって解説してみよう。仲間だけに通用する言葉を作句に用いて、悦に入るなどは笑止千万であることは万々承知しているが、軽い気持ちを披露したまでであって、笑殺して下されば幸甚である。

柳恩は甘くすっぱくほろ苦く
柳恩をおすそ分けする友ができ
柳恩の寝床へすがしい朝が来る
柳恩がこころの角を削り取り
原点に戻って柳恩の深さ知る

題―先―十二月二十日締切（二月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井三五二〒七一一

本田恵二朗

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 **西出螺子製作所**

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八

第二百四十五回（四十六年度第十一回）

大萬川柳

「針」

入選発表

選者　川村好郎
投句総数　四百二十句
入選　四十五句

堺　慶之助
つり針のエサだけ盗っておんな逃げ
今治　昌道
浪費癖とはうらはらな毛糸針
貝塚　つき子
ママになる産着へぎこちない針目
堺　真沙子
針千本忘れ二次会三次会
下関　木石
女一人世を生きてゆく針供養
富田林　花梢
もう旅の心になって縫い急ぐ
門真　鉄児
針箱のない荷を祖母は不審がり
大阪　誓二
よそ様の晴着に気遣う針運ぶ
東大阪　弥生
注射針この一本にある命
大阪　保夫
針ピンも節約しろと社のムード
鳥取　春海
春うらら針の運びも遅々として
大阪　比呂路
耳とれた針と気がつく老眼鏡
米子　瑞枝
仮縫いの器用な指が針に添い
大阪　庸佑
針持って家計助ける灯があかい
倉敷　素身郎
針ほどのことも知りたい恋心
平田　代仕男
核心へ検事は針を刺す如し
岡山　白水
会う視線一目とばしたレース編み
大阪　野迷路
注射針打ちおさめとなる医者の顔
和歌山　葵水
羅針盤妻のバッグにしまわれて
大阪　水客
キリギリスの針にも秋が深くなり
鳥取　陽山
あの方へ心をこめて運ぶ針
倉敷　千翁
待ち針を打って似合うかしらの顔
尼崎　徹也
千人針ああ日本史の汚点
岡山　葵丘
親方の齢を知らさぬ畳針
堺　一二三
放浪の身に故里を指す磁石
嫁ぐ娘へ一針ずつの愛を縫う
藤井寺　吸江
注射針次の子供が先に泣き
避雷針手持ち無沙汰に冬を立ち
富田林　美代
平和です女が針を持ったとき
針の目がそろわぬままの日のあせり
倉敷　梁水
妬いている証拠にミシン針が折れ
吉報を待つ秒針にじらされる
東大阪　生長
針箱に詰めて嫁くほど縫えもせず
針仕事しては按摩に儲けられ
倉敷　恵二朗
キオッケの姿勢で仮縫い突き刺され
針の山根性で越した日を憶い
プロレスラー三針は傷のうちでなし
佳句
大阪　一三夫
針一つ落ちてもわかる村に住み
大阪　君子
胎助に一息入れて針進め
東大阪　弥生
敏感に職業意識で見る針目
大阪　水客
避雷針古都暮れてゆく色になる
呉　英詩
釣針の根気に負けぬ魚の知恵
人ノ句
倉敷　梁水
祝言へ針の言葉も添えて父
地ノ句
松江　冨喜子
悲喜の布無情の針が縫いあげる
天ノ句
富田林　花梢
サボテンの針も心にささる悔い
選者吟
癒えてなお夢は点滴注射針

ベストテン（十一月現在）

営業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
今福店
十三店
九条店
買いよい
良い安い
月賦百貨店
crcdit system
越丸
本社　大阪市阿倍野筋3—15—1
TEL 632—3806　3807

一　花梢　二一、〇　富田林
二　真沙子　一九、〇　堺
三　弥生　一七、〇　東大阪
四　千代　一六、〇　米子
五　一三夫　一六、〇　大阪
六　一二三　六、〇　堺
七　恵二朗　一五、五　倉敷
八　文秋　一五、五　大阪
九　水客　一五、五　大阪
一〇　つき子　一五、〇　貝塚
一一　天笑　一五、〇　堺
一二　どんたく　一四、五　神戸
一三　扇水　一四、〇　倉敷
一四　木石　一三、五　下関
一五　吸江　一三、五　藤井寺
一六　瑞枝　一三、〇　米子
一七　梁水　一三、〇　倉敷
一八　筒子　一二、五　倉敷
一九　里風　一二、〇　倉敷
二〇　君子　一二、〇　大阪
二一　素身郎　一〇、五　倉敷
二二　美代　一〇、五　富田林
二三　柳志　一〇、五　大阪
二四　静馬　一〇、五　宝塚
二五　一栄　一〇、五　大阪
以下略

昭和四十七年度第一回
「初耳」　五句以内
締切　十二月二十日

第二回
「波紋」　五句以内
締切　一月二十日

投句先
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社内　大萬川柳係

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い、柳界の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもって目的とす。

二、毎月の出題並びに選は川村好郎が担当し、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は公平を期して到着順に一句毎に句笺に清記し、無記名のまま一連番号を附記し、順次混ぜ変えて選者に渡し、選句をする。

三、毎月二十日締切、出題及び入選発表は毎号の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め、毎月のベストテンを発表する。同点の場合はその月の投句先着順とする　天位四点　地位三点　人位二点　佳句一、五点　平抜き一点。

五、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として、年度間の綜合点の成績に依り順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦、懇親宴に招待す。なおベストテン第一位には特に梅里賞をもって表彰する。

六、本会の大会は毎年二月に開催する。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定む。

七、投句その他の連絡先は川柳塔社大萬川柳会係へ。

「雅号ぶっちゃけばなし」　(87)

ひゃくしゅ
島　百酒　居
しまい

故松江梅里先生に師事して川柳を学びだして十年。今にそれらしい句が作れない未熟さ。免に角雅号を名乗れと奨められ、思いつきで間に合わしたのがこの雅号。生まれの干支が「一白水星の酉」これを縮めてでっち上げた次第。ところが、たまたま私が酒好きであるので、それを知る人は酒に由来したものと解している。甚だ不本意なのでその都度私は前記の由来を説明するが、誰もその気転を褒めてくれない。どうせ駄句ばかり捻っていると見通してか、川柳の話は素通りして飲む方へ話題を移されてしまう。そして例外なく呑んべの私には似合いの雅号だと不風流な褒め方をしてくれる。心外千万に思っている次第です。

（会社役員　六十二歳）

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

（橋高薫風・担当）

▼中島生々庵主幹は十月二十四日豊中市民川柳大会の選者として出席のため、同日小石夫人出演の毎日ホール「賤の小田巻」の舞踊や南区医師会の秋のレク「松茸狩り」にも欠席。なお十一月七日新潟の友人を見舞い、八日から十日まで金沢・能登一周など阪大クラス会に参加、小石夫人も同伴された。

▼菊沢小松園氏（大阪市同人）は句会の翌日日光・華厳の滝などを観光。―生きている尊さを知る滝の音。

▼富士野鞍馬喜寿祝賀会は昭和四十七年二月十三日午後二時から東京築地明石町の治作で開催。兼題、温室・女友達・喜び、席題二題

祝吟一句。会費二千五百円申込みは一月末日までに東京番傘川柳社宛。

▼川柳ジャーナル社では河野春三氏が来年三月古稀を迎えられるのを記念して河野春三特集（ジャーナル別冊）を刊行される。それに関して特別寄金を募集している。一口五百円（一人何口でも可）、送金は川柳ジャーナル社事務局宛。又、「春三賞」作品募集も併せ行われている。作品（新作）十句を十二月二十日までに川柳ジャーナル社編集部へ。表彰一位一万円、秀作三篇にトロフィ授与。

▼岡山県文学選奨受賞祝賀歳末川柳大会は十二月十二日（日）午前十時から岡山県遺族会館で開催。兼題、他人・復讐・公害・傷・真実。公開討論会「これからの川柳の進む道」講師は東洋樹・午朗・風来子の三氏

▼第七回岐阜市文芸祭入賞作品が発表になった。文芸祭賞―ふるさとへみやげは背なに一人ふえ―野田正子岐阜市長賞、保険金安い命にして掛ける―島津基生市教委賞、家族構成働くものは父ひとり―市川鱗魚。

▼岐阜川柳社の新年おめでとう並びに明二・鱗魚の還暦を祝う句会は昭和四十七年一月十五日（祭）午前十一時から岐阜商工会議所五階会議室で開催、兼題、祝・竹・演技・山菜・意地・童心・歩幅・香水、出句締切りは午後一時、会費三百円。（投句は受付けず）、特別課題、魅力・市川鱗魚選、夫婦・田中明二選、（各題三句）の投句は百円封入の上、十二月十五日までに岐阜市本郷町六丁目井川紋弥方岐阜川柳社「特別課題」係宛。

▼桑原狂雨川柳展は十一月十六日より三十日まで明石デパートで開催。

▼根室一川柳社五十周年記念東北海道川柳大会は十月三日（日）午前十時から根室市千島会館で開催。

▼第八回青森県下川柳大会は十一月三日（日）午前十一時から五所川原市中央公民館で開催。

▼第五回徳島県芸術祭参加川柳大会は十一月十四日（日）午前十時から県郷土文化会館で開催。

▼福島県芸術祭川柳大会は十月三十一日（日）午前十時から県文化センターで。

▼防府市制三十五周年記念川柳大会は十月二十四日（日）午前十時から防府天満宮社務所で。

▼第十三回熊本芸術祭参加川柳大会は十一月二十八日（日）午前十時から熊本市の県社会福祉会館で開催。

▼第二十二回京都勤労者文化祭川柳大会は十一月七日（日）午前十時から京都府立勤労会館で。

▼第十三回北日本川柳大会は十月十七日、更上閣で開催、寄せ書拝受。

▼原独仙氏金婚、尼緑之助氏路郎賞受賞祝賀句会（既報）からも寄せ書を戴いた

▼川柳えんぴつ創刊二百号誌上川柳大会が川柳えんぴつ社主催で開催された。

▼川柳「こなゆき」誌の編集を六年間担当されていた新川洋々氏（小樽市）が今年一ぱいで辞任される。誌上に活気ある企画で好読物を掲載し、読みごたえのある誌面を続けられた功績は

本社同人賛助会員

宮地双楽氏急逝

―関連記事・46P―

大きく、捲土重来再登場の近からんを祈る。

▼川柳研究社（東京都）の郵便番号が一二三に変更になった。

▼金井文秋氏（大阪同人）は、「伊予松山に来ています。ハガキは面河渓の景観で、石鎚スカイラインからの全山の紅葉ぶりは筆では書けぬ見事さです。明日は松山城から奥道後へ。帰途は生まれてはじめての空路です。」と十月二十四日付のお便り。

▼河村日満氏（鳥取同人）から、「緑之助・独仙両氏の祝賀の会に出ました。独仙さんの頭の黒いのにびっくり。川柳塔準賞の榊原秀子さんにも会い、大盛会で雷と共に大きな雨音を聞いたのがヒョウだったらしくいやはやびっくりは翌日の新聞でした。来年の賞は、千代・瑞枝さんあたりがとってくれるかも知れません。駅前の大火、貞山さんがおられますが無事でした。」

▼東野大八氏（美濃加茂市）は十月三十一日興津の水口屋ホテルで社主催のゼミに出張、十一月五日清水港から蒲郡へ。次郎長と樗牛の墓を見て、両者のコントラストにニタニタ。ヤクザの方が人気も霊験もだんちなのが面白いと。

▼小西無鬼氏（兵庫同人）は八尾菜の花句会と合同の松茸狩りに無理な山登りをして二日間臥せる始末で、十月十六・十七日の祭礼には、親戚からの押しかけでキリキリ舞い。それでもお客を迎えることは楽しいですと。

▼岡村久志良氏（岡山同人）から、「芋版の月の証拠に虫を描き」の絵心にあふれたお便り。

▼永尾英断氏（兵庫同人）から「英断のいる処酒がきれませんので飲まれぬ方には申し訳けない次第です。松茸狩りの兄の写真は頭ばかりと光線の入ったのとですべてパー。ご了承を」

▼水粉千翁氏（倉敷同人）は逸見灯竿氏（岡山市）と石楠花川柳会の婦人連と帯同、十月二十四日備北青年の家へ吟行。津山から新見にかけての山脈の谷間は二千万年前には海だったらしく貝殻が出ているのに驚きで空気のうまかったのが印象的だった由。

▼番傘一般近詠選者柴田午朗氏は身辺多忙のため選者を辞退。次期選者は磯野いさむ氏。

▼堀江芳子さん（島根県）から、「医師の往診も週一回となり、気分も少しずつ快くなっております。

▼大阪市文化祭川柳大会は八十余名出席。席題多久氏選で西田柳宏子氏が秀句にかがやいた。

▼生信笑子さん（竹原市）から、「同人総会の本社句会で「頼まれて頼んでガイドさん多忙」が地位になり九十九名出席。栞氏ほか八尾市同人の熱意が実る。これからも川柳にうちこんで行きたいと。

A－⑭
疲労・肩こり・神経痛に
アリナミン®A
☆5ミリ錠・25ミリ錠があります
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で
タケダ

喪中につき年末年始のご挨拶を欠礼させていただきます。

野田素身郎

飲んで酔い

高鷲亜鈍

飲んで酔い飲まされて酔いそれをみている吸血児
手甲に死あざがでて俺も年
生れかわったところで鈴虫泣き始め
あんなことこんなことと執つこい説教
暑くても一人でかけぬ扇風機
喋りまくっているとき自覚症状おぼえず
叱るのはご尤も朝からテレビかけっぱなし
更年期その日稼ぎをよく休み
男去る聾音女戸を叩く
天井が回る女の帯を解き
紐に紐・帯に帯〆・苦しかろう
野暮などは知りつつ遅いのを怒り
好きこのんで働いてはいやあせん
食べないでおればいつでもやめますよ
自分勝手に腹わた煮えくり返る
世話女房でも所詮は目明きぼくは盲
よく書けているなと色紙褒めてくれ
盲の手を握れば額が白々と
町内の雀うるさい聞き合わせ
手土産を蹴とばし玄関に送り出し
酒に負け議論に敗けて老兵去るのみ
盲の酒呑みくだをまくので嫌われる
妻や娘にもっと詩人を理解しな
平凡な盲のままがよいと云う
元旦の留守は一升瓶を横に寝る
元旦はひとりだけのもの酔うて寝る
元旦だ痔たてないでと祈る酌

安井八翠坊を偲ぶ会
昭和46年10月31日　於京都西角

八翠の馬上姿を見た記憶　近江　砂人
将軍をすてて川柳にヒゲをつけ　奥本　唯然
八翠坊軍務多忙の宿酔い　酒井　塵声
大正の一と桁軍歌おとろえず　保木　寿
耳へ手をあてて八翠顔を寄せ　森脇幽香里
身ぶり手振りでバレ句の御解説　野村　勝美
めがね越し誤字たしなめる八翠坊　吉沢喜代志
五馬路の八翠訪うて朝帰り　井土　自楽
ほろ酔いの女の肌のさくらいろ　川口　光子
八翠坊が遊佐将軍に馬を画かせ　森口　一風
よせなべに故人を偲ぶ京の秋　荻原スミエ
八翠坊聞く方も酒うまくなり　葵　徳三
八翠坊うわさ話しは女酒　山崎　喜楽
艶聞をひろうよせ鍋つつき合い　神田　福子
数々の逸話故人を偲ぶ会　橋本　言也
水割りの酔とホテルの暗い道　伊藤　入仙
ふぐ鍋に髭をぬらして若くなり　堀口　塊人
夜話情話いろはにほへと八翠坊　大井　正夫

▼大陸柳人同窓会報71年版（欲喜仏・ウオツカ・妓生他六題と文）希望の方は送共三百円（郵券可）670姫路市北条250鉄40大井正夫へ。

▼山田季賛氏（高槻同人）は十月十四日鉄道記念日に、三十年勤続效続章を受章。この受章を記念して御陵巡拝を決心された。

▼不二田一三夫氏（本社）は新関西新聞「おとなの絵本」の執筆陣として活躍中。

▼村田瓢太氏（守口同人）が主宰する「関西奇術教室」の発表会が十一月十四日午後一時から福徳相互銀行本店八階ホールで開催。テーマは〝錯覚と幻想の祭典〟だった。

本社同人賛助会員（十一月十三日）

川岡霊眼子氏急逝

―哀悼の意を表します

ATLAS
アトラス
高級洋菓子・レストラン
本店　洋菓子部TEL (21) 2334
レストランTEL (33) 9974

本社　十一月句会

会場　以和貴荘
六日　午後六時

文化の日にそっぽを向かれ、ややさびしい出足だった。欠席の方々に惜しいと思ったのは吉田圭井堂氏の柳話である。

「選者と句筵」というのが題だった。本社句会の出席者が平均七十名。三句以内厳守だから二百十句あるとして、かりに三度読むとすると一葉の句筵に要する時間は三秒ちょっとだそうだ。しかも選者泣かせの文字がある。意味の通じない文字もある。

柳歴の浅い人から席題の選をする（本社出身選者の場合）しかも披講は席題からだ。とくに一番最初の選者は時間的に苦しい。

これらの話を、圭井堂氏流の軽妙さで聞き手をグングン引っ張っていく。

兼題「正論」は川柳の題ではないと小松園氏が披講前に云っておられたが、皮肉にも入選句が一番多かった。

月間賞杯はベテラン栞氏にかがやいた。これで一舟氏、酔々氏の三つ巴となり、十二月句会は大向うをうならすことだろう。（F）

―河井庸佑整理

出席―新之助・一二三・肖二・綾女・文秋・一舟・水客・柳志・野迷路・静馬・敏・圭井堂・重人・与呂志・一三夫・千万子・栞・維久子・良子・静歩・葛城・古方・天笑・喜風・柳宏子・形水・誓二・凡吉・吸江・いさむ・トメ子・儀一・花梢・千梢・百酒・葵水・史好・鬼遊・小松園・庸佑・宣介・修史・之保・弥生・季賛・あいき・一治改め悦郎・河産・酔々・葉子。

席題「ネックレス」　高杉　鬼遊選

ねっくれす　悲しみ秘めた　句集なり　与呂志
ネックレス　男の指に　助けられ　小松園
ネックレス　今宵の恋を　賭けてみる　弥生
ネックレス　とめあぐんでる　太い指　天笑
〇一つ上のネックレスとは見てられず　千梢
終電車　ネックレスまで　酔うている　酔々
ネックレス　男心は　だまされず　凡吉
逢うてまうしろめたさのネックレス　形水
万のつくネックレスでも子はしゃぶり　千万子
ネックレスそこにかすかなキスのあと　一三夫
ネックレス　妖しく光る　日の女　柳宏子
豚に真珠　鏡にもそう言われ　千梢
それとなく　襟から覗くネックレス　圭井堂
ネックレス　恋の鼓動と　知っている　花梢
借金に行くのにネックレスだのリングだの　静馬
粧えば三つは若いネックレス　柳志
ネックレスうちのおばはんまねだり　一三夫
ネックレス　ピカリ家裁で　悪びれず　一舟
ネックレス忘れ　間抜けた　胸を出す　綾女
ネックレス　お国訛りの　胸でゆれ　花梢
ネックレス外しお茶漬け　欲しくなり　形水
ネックレス誰にも似合うものでなし　吸江
ネックレス変わり相手もまた変わり　柳宏子
泊る気になって　外したネックレス　柳志
ここからが首ですよというネックレス　あいき
ネックレス　初恋らしく　下を向き　いさむ
二巻きにした　囲われの　ネックレス　鬼遊

席題「分ける」　城　一舟選

公平に　分けるに　苦労する　形見　文秋
半分わけしても　泣き声もの　足らず　栞
子沢山　ちぎって　分ける　母の幸　千梢
共犯に　なる分け　前の金　惚れ　鬼遊
山分けへ　貧しき　心さらけ出し　修史
裾分けで　ひとり暮しは　飯にする　花梢
公平に　分ければ　幹事の　分がなし　栞
生きている内に　聞いとく　片身分け　良子
根分けして　ライバルとなる　花のいろ　花梢
形見分けする　気の派手な　柄を買い　柳志
仲裁は　少し女へ　分を持たし　葛城
招待し　リボン　で分ける　土産物　トメ子
分けへだて　無く先妻の　子も育ち　野迷路
まあまあと分けた喧嘩にまきこまれ　庸佑
遺産分け　保険もあって　揉め直し　喜風

遺産 分け 上手な 舌でよう 稼ぎ 弥生
明暗を 分けるカルタが 配ばられる 一三夫
へそくりで形見に分けるものを買う 文 秋
分けられたお菓子が過保護気に入らず 儀 一
分けるから委して置けとごまかされ 儀 一
分け前が 平等すぎても 気に入らず 柳宏子
淋しさに 又取り出した 形身分け 葛 城
等分というのが しゃくの種になり 静 歩
愛想も 使い 分け する 小商い 吸 江
顔揃うまでは 分け ない 土産物 吸 江
聞き分けの良い子で医者に掛りずめ 静 馬
分け終るまでが待てないつまみ食い 柳宏子
お隣へ 分けた 小菊が 垣を越え 綾 女
左分 けしてたに 妓不 思議がり 一 舟

席題「階段」　羽原　静歩選

嬉しさの二段ずつ二段ずつ上り 柳 志
階段の中途で ウインクして のぼり 葛 城
階段 を 見上げ 陸橋 引き 返えす 肖 二
タラップ の 後姿 は 追われてる 花 梢
階段の 出合 がしらに あせが 出た 千万子
階段の ホットパンツに 無視される 形 水
階段で 蹴り 落とされる 役が つき 一三夫
階段に 短命 内閣で きあがり 新之助
ジャスミンの 匂い階段で すれ違い 小松園
事故に続くタラップと知らず帽子振る 生々庵
泰平 の 非常 階段 錆びたまま 柳宏子
部屋 割りへ 非常 階段 確かめる 肖 二
吉報へ 階段 ひとつ ふみ はずし 庸 佑
階段をあがると 中で 気が 変わり 庸 佑
階段に なれば 気の 合う 妻となり 一 舟
階段の テンポが 早い 人が待ち 重 人
揉めている 声 階段へ 耳を 当て 小松園
ど忘れをして 階段をまたくだり 天 笑
晩酌 の 量が 階段 踏みはずし 良 子
階段をななめに消えた 脚線美 天 笑
お引きとり 願う 階段まで 送り 水 客
階段の ひとつ ひとつを 試歩の 朝 静 歩

兼題「横文字」　金井　文秋選

横文字の 店 神戸へ 来たなと 思い 紫 香
習い たての 横文字で もう 親 爛り 一二三
文化日本 横文字 ばかりはんらんし 酔 々
辞書にない 和製横文字 また増える 悦 郎
横文字をミックスさしたラブレター 花 梢
横文字のメニューもおいてよく儲け 良 子
メイドインジャパン金魚ゆらゆら積み出され 静 歩
横 文字 の 解釈 孫に して もらい 圭井堂
横文字は姿で 読める キャデラック 柳 志
横文字に ラベル を 変えた 新製品 凡 吉
横文字がちょっぴり読める学を見せ 百 酒
横文字の 説明 付けたら 売れ 始め 綾 女
横文字を立てに書いてるネオンの灯 一三夫
横文字 に 弱い 家 系で 国文科 葵 水
横文字が スラスラ読めて 嫁き遅れ 圭井堂
横 文字 も 哀れ 異国の 無縁塚 静 馬
横文字の最後にメードインジャパン 栞
中学 の 横文字 母を 小馬鹿にし 与呂志
横文字を 市場 籠でも 見せる 見栄 生々庵
横文字の ネオンも咲いてる 夜の街 誓 二
コンサイス引いてローマ字だとわかり 一 舟
横文字 の ネオン 溢れる 日本の夜 どんたく
横文字を 外す自信の ないメーカー 形 水
横文字の ラベル 和製と 値で 分り 新之助
横文字に 慣れて 国語を 忘れかけ あいき
誰が読むのか横文字ばかりの日本製 小松園
横文字が 旅の 風情を ぶちこわし 天 笑
たよりない 横文字 変な 料理食べ 維久子
横 文字 に 弱い 貴 夫人 族 狙う 形 水
読めないだろうとたかをくくっているカルテ 文 秋

兼題「無芸」　傍島　静馬選

ご指名の ころは トイレいる 無芸 日 満
軍歌 ならと 無 芸がなりたて 軒太楼
いっち 先 無芸の 膳が 空になり 一 栄
暇と 金 出来て 無芸の おきどころ 花 梢
母子 家庭 芸ごと などは 遠い夢 誓 二
美しく 老いて 無 芸と 思わ せず 水 客
生涯 を 働き 抜いた 無 芸なり 天 笑
やりたいのが居るのに芸なしばかり責め 生々庵
お開きになる まで無芸 酔って寝る 酔 々
芸のなさ 風呂場で虎造 真似ている 小松園
親友 が 無芸の 代り 受けて 立ち 綾 女
宴たけなわ無芸そわそわおちつかず 庸 佑

無芸無趣味それにお金も蓄めていず　百　酒
無芸　先ず　座る　位置にも　気を使い　与呂志
こっそりと　無芸　手品を　習い　出す　形　水
末席の　無芸は　仲居に　助けられ　一三夫
拝んでる　無芸へ　順番　やって　来た　生々庵
隠し芸に　なって無芸は　寝てしまい　葛　城
酒の出る　会へは　無芸　出たがらず　文　秋
順番を　飛ばして　呉れず　犬の真似　圭井堂
幹事　さん　無芸で　銚子　持ち歩き　トメ子
芸の　ない　膳へ　座りに　来た　仲居　柳　志
芸無しに　社中　高分で　皆んな　借り　静　馬

兼題「ボウラー」　正本　水客選

ストライク　恋も　お金も　忘れさせ　一二三
欲求　不満　ピンが　亭主の　顔に見え　一二三
母ちゃんのボールゴロゴロ暇がいり　与呂志
ボウラーの人気に歌手が追い越され　文　秋
マスコミがプロボウラーをショーにするロングスカートはかせば漫画になるボウラー　章　雅
かんしゃく玉に似た快感があるボウラー　文　秋
一本が　こけず　ボウラー　手を　握り　紫　香
自動車で　出たボウラーの　子を案じ　日　満
女子ボウラー腰のひねりが記事となり　栞
片腕で　稼ぎまくっている　ボウラー　河　産
ボウラーの　助言は　まっすぐに歩け　重　人
投げたあとボウラー女の線を失わず　いさむ
ボウラーの球　筋替　えた　咳ばらい　天　笑
二百ピン　越してボウラー　少し笑み　綾　女
ボウラーに　腰が　高いと　抑えられ　圭井堂
ボウラーの　歩巾　やっぱり　女の子　葵　水
ボウラーの個性ボディアクションに見る　一三夫
さわやかさ中山律子のパーフェクト　一三夫
ボウラーもある日気ままなボールなげ　千万子
ボウラーの手に量感あるストライク　トメ子
ため息を　背に聞いてる　ストライク　天　笑
ペアで　組む　ボウラー　只今　恋愛中　一三夫
ターキーが出てから素直な足の位置　水　客

兼題「正論」　菊沢小松園選

一人で　吐く　正論に　要る　勇気　一　栄
正論で　食って　行けない　世と悟り　一　栄
正論へ　世間　あまりに　冷たすぎ　好　一
末座　からの　正論　合点されただけ　軒太楼
意気天を　衝く　正論を　もてあます　日　満
正論へ　だんだん　みんな黙まり出し　紫　香
歳なりに　正論　胸を　はっている　葵　水
正論へ　盃腰を　折りに来る　葵　水
ときならぬ　場所で正論　ほとばしり　葵　水
正論　述べる　勇気は　胸に　ある辞表　一二三
どっちみち　停年正論　吐いて　辞め　肖　二
顔ぶれを　みて　正論を　ひっこめる　逸　名
正論を　吐いて　皆んなの　爪弾き　静　馬
哀れ　正論　誰も　相手に　してくれず　古　方
とっ弁の　正論こぶしが　ふるえてる　一三夫
机たたいて　正論を　盛りあげる　花　梢
正論と　信じ　こんでる　日の若さ　柳宏子
正論に　振り回わされている　打算　河　産
松下　はんが　説けば　正論に　みられ　史　好
タイミング　よく正論が　切り出され　良　子
正論は　一応善処で片付る　静　馬
正論が　通らぬ世間　知りはじめ　文　秋
正論を　述べる男の　眉涼し　酔々
正論が　独り　ポッチで　酒を飲み　柳宏子
汗一ぱい　かいて正　論口ごもり　一二三
鳥籠の　なかの正論　とは言わず　水　客
正論の　自負が　妥協を　寄せつけず　百　酒
土壇場へ　来て正論が　盛り返し　誓　二
正論に　耳痛いのが　目をつむり　一二三
正論を　吐く若者の　眉清し　一三夫
正論を　無視する顔が　待っていた　花　梢
正論の　つもりの頑固　持て余ます　形　水
正論も　時の流れに　流される　肖　二
盃を　持てば正論　ぶちたがり　天　笑
年輪を　経た正論は　血が通い　あいき
正論を　女の前でや　や崩す　野迷路
抵抗を　受けて正論　身がまえる　凡　吉
正論を　曲げず上司に　マークされ　文　秋
泣き寝入りした正論が　よみがえり　一　舟
打たれても蹴られても正論まだ叫び　誓　二
ひがんでは　ならぬと正論　温める　生々庵
正論も　多数決では　よく負ける　敏
正論へ　反対咽喉が　かわききり　花　梢
正論が　来席から　出て　座が　白らけ　栞
正論を引っ込める　ほど　零ちぶれる　小松園

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

ささやま・菜の花合同句会

千円の松茸おそるおそる嗅ぎ　みのる
珍客へ松茸の値言いそびれ　可住
食欲の秋を松茸素通りし　虎声
秋空もさやかに晴れて茸の山　竹堂
松茸にそっぽむかれて酒が売れ　千歩
松茸の匂いだけなり宿の汁　古仙
店頭の松茸に主婦しばし佇ち　弥太郎
山村に居て松茸の希少価値　一声
松茸の催促らしい便り来る　雅佐女
松茸の籠の余りを丹波栗　誓二
松茸狩幹事が一籠買うただけ　力
梵鐘の僕も寄附した響聴く　無鬼
打てば響く女の肌が枯れている　花梢
天皇の御旅行世界中響き　村雨
大臣の一言株の値に響き　越山
夜更かしが響いて一汽車のりおくれ　よしの
反響があってそれからあわてだし　凡九郎
梵鐘の響浄土の道ちかく　百合子
農機具の響に牛も追いやられ　素水
発破する響へ飯場の壜が落ち　金三
ドラの音響いてテープ強く持ち　飛鳥
大太鼓さすが古老の打つ響　儀一
雷鳴の響に昼寝起される　とおる
瓢簞の落ちつきのない生まれつき　小松園
那智の滝吸いこみそうな響たて　維久子
つけ届けした反響がまだ来ない　美代
帯〆にちろろと揺れる小瓢簞　富士子
莫遮心の錦ほめてくれ　栞
電車ふくらんで錦の野を走る　〆女
錦繡の絵筆に生きる城下町　ゆきお
錦着て帰れば寄附が待っていた　八陣
作業衣の汗を錦として綴る　葵水
錦絵の花のお江戸はのんびりと　茂雄
故郷へ他人を泣かせてきた錦　雀踊子
錦木の丹波篠山酒うまし　酔々
お互いに拗ねた背中が気にかかり　鶴翠
人前で拗ねてみてからたつ噂　弥生
哲学のような話にごまかされ　一治
堪えて来て哲学今や笑うのみ　近江
哲学はわからぬままに生活たち　綾女
苦労人語れば哲学じみてくる　新之助
哲学を教え世渡り教えられ　一舟
日雇いが汗を流して詠んだ詩　河産
悪臭の川に目高の詩が消える　英断
共稼ぎ鍵に生活の詩を秘め　鬼遊
斗病のわりに明るい詩をつくり　薫風
繙いたリルケの詩集空の青　掬水
甘樫の丘へ詩人となって佇つ　肖二
故里を捨て故里の詩をつくり　初音

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

秋晴れになればなったで光化学　瓢太
ぜに金に超然として世捨人　扇里
銭欲しい欲しいで一生過ぎてゆく　寿子
別れろと身上相談他人ごと　星斗
別れ道未練のお喋りまだ続き　一世
階段をミニはお尻へバッグあて　トキエ
女房の尻年々に重くなり　茂児
秋の夜を秋の夜にして虫の声　立児
初秋の風スダレに巻きとる句座の朝　閑子

どんぐり川柳会（羽曳野市）川村好郎報

悲しさは喰われて逃げる虫の恋　一治
高原の気流をすくう捕虫網　酔々
蓼喰う虫がいてこの世の面白さ　一歩
やけくそで君も泣くのか蟬しぐれ　正博
公害にめげず嬉しい虫の声　桂馬
こおろぎとゴキブリ同じ縁に住み　吐来
虫市場出そうな時世に虫生まれ　竜虎
鈴虫は命の限り秋を告げ　文作
そろそろと歩む老人坂の町　秀果
お見合の時はそろそろミニ娘　チエノ
うなされて起きればこおろぎ夜を告げ　小松園

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

幸せなことだけ他人の耳に入れ　修史
亡母を恋い雲の階段夢にみる　真砂
愛すればこその別れよ千切れ雲　痴亭
大仏の貫録そこに歴史あり　酔々
他人とは思うてませんと甘えられ　生長
他人の目二人の仲を見ぬいてた　つき子
他人から見れば何でもない泪　鬼遊
ドルショック青空の中雲走る　重夫
ふんわりと雲春月を押し上げる　一治
白い雲に今日の望みを置いてみる　比呂路

雲一つない日の弔詞読みにくし　正博
児の画には雲青にして夢満たす　喜風
雲一つ浮いて絵になる空の青之保
四畳半住んでみたいな雲の上笑児
愛人の雲つかむよな返事され　儀一
他人ではもうなくなった下駄揃え　小松園
人間も生まれ変れる雲白し　薫風

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

出発へ紆余曲折の過去を超え　八郎
団体車出発一分間遅れ貴山
頭数そろわず出発またおくれ双楽
旅立ちへ薬しのばす母があり　和郎
出発のふんぎりつかぬ空模様　一奴
ハイキング出足にぶらす朝の空　儀一
出発をすれば居眠りもうはじめ　圭水
出発を悲しくさせるドラの音　柳信
人生の出発男の子として生れ　宏子
出発へ肩身のせまい子を憶い　誓二
刑終えた再出発へ冷たい眼　金三

むらくも川柳会　藤井明朗報

いつ逢える星へ運命を待ちつづけ　秀子
幸わせな星に生れて七光り　文子
嬉しさにとけて新居の灯が明い　孝華
うれしい日無口の父もほろりとし　明朗
還暦に子らが取り巻くうれしい日　清夢
孫が来てうれしがらせて買わされる　笑子
新築の木の香に酔うたうれしい日　みどり
商魂のあの手この手へ迷わされ　とみ子
初孫の重みは手から手へ渡り　芳子
手の垢で光る柱をまもり抜く　白汀
共白髪までと神父の手に誓い　正朗
さよならも声にはならず手を握り　一葉
実印を捺す手がふとすねていた　祥月
どこ等辺まで手を握る国と国　一郎
満面にうれしさ秘めて誓いよむ　澄水

大阪逓信病院川柳会　森下愛論報

帯かえただけでも女若くなり　没食子
逢いに行く帯とも知らずしめてやり　良子
帯一本買うてもくれずこきつかい　カネ女
流れ雲眺めのんびり糸をたれ　竹荘
雲一つアクセサリーに朝の富士　草右
約束の時間は呑み屋ですでに酔い　夏生
誕生日孫約束のプレゼント　愛論

川柳まばたき　出原敬一報

路ばたの会話が見ていた事故現場　文子
胸に手をあてて因襲断ち難し　大溪
莚旗立てて路傍へ坐り込み　麦天
買うトマト帽子に入れて妻の留守　海山
制帽と一緒に威厳も脱いだ父　望
朝刊は濡らさず濡れてゆく帽子　不老
此の手をはなせば積木くずれそう　三重子
腹芸はたしか狼狽すら見せず　初美
狼狽の手許にあった防犯ベル　早苗
安全対策後半に回っている過密　文己枝
亡き父母を語りつ新妻と墓洗う　松月
油断した一瞬女の平手打ち　三四詩
子に送る学資へ寡婦のはく軍手　草加
二杯目に手袋をぬぐコップ酒　康明
ヘルメットとって化粧の娘が笑い　君子
手の内はお見通しだと妻の顔　光月
白い手に泥の化粧をする覚悟　蓼春

東大阪川柳会　竹中肖二報

おしぼりがエッチな顔も拭いて呉れ　浊水
貸切りのバスでおしぼり出してくれ　隼人
再スタート見守る保護司の目が温い　弘生
誘われるままに風鈴風へ鳴る　あいき
幼稚園誘い合わせて手をつなぎ　平八郎
希望とは違った地位で顔が売れ　葵水
誘われた保険が役に立つ不幸和子
おしぼりで最後は鼻の穴を拭き　句念坊
虫の音につい誘われた夜の散歩　一栄
神詣誘うことなく足が向き　T清人
無公害の切なる希望空まわり　美智子
かしわ手もおしぼり叩く手も同じ　新司
走り書きちよいちよいちごだ文字がある　一声
予期しない誘いへ香水変えて出る　弥生
おしぼりで勝越しかけた汗を拭き　H清人
走るだけ赤字に悩むローカル線　豊三
幼な児の画いた太陽丸ゆがむ　綾女
抱き合うたアダムとイブを陽が照らす　肖二
飼犬と孫が走って出迎える　思月
燃え上る陽の大きさも土佐の海　竹充
悪友に誘われました刑事室　三十四
野次馬が走る消防車も走る　湖風
結ばれるまでは太陽など言われ　儀一

喪中につき年末年始は欠礼させていただきます

大坂形水

スタートに遅れた騎手の荒い鞭　鶴声

悪友の誘いを妻が目で拒み　金三

呼び止める声を後に孫走る　佳鳴

おしぼりで一息入れる会議室　誓二

御来迎拝む五合目霧包む　凡路

秋の風女の影を走らせる　伸吾

眉引いてお客を誘う灯に生きる　一治

開店のおしぼり祈るように出し　酔々

やり直しするスタートに妻子の瞳　冨久一

目くばせをしておしぼりを置くマダム　恭太

太陽だ星だと甘い恋のうた　志都

スタートへ夢がこぼれる園児の瞳　静歩

誘わねばよかった悪い酒と知り　文秋

馳けつけて来た入口で発車する　喜正

スタートは仏滅だった共白髪　連夢

巣立つ日のスタートラインは美しい　桂太楼

豆腐屋の朝は暗さを走る水　木耳

スタートの斗志へ虹が見えてくる　言也

希望した妻だ不幸も唾をのむ　喜風

太陽の恵み忘れて月を賞で　大丘子

スタートへもう未来図は胸にあり　久子

改札へ走った人を見て走る　幸子

おしぼりを真黒にしてよいお客　鬼遊

父の瞳を背に誘いの受話器おく　六竜子

川柳わかやま

垂井葵水報

玩具箱ひっくりかえして上機嫌　佐一朗

モデルガンサツににらまれ色を変え　竜

玩具見て父の目を見た頃の僕　喜一

たたいてもこわれず手作りおもちゃ　美智世

未だ見ぬ子の玩具あれこれ買うてくる　みさお

玩具箱ぎっしり詰めてはなさない　栄

秋空に飛ばして見たい竹トンボ　良太郎

アポロからロマンチックな夢も消え　富子

月を待ちなにささやくか月見草　一風

月明り少し色づく柿数う　嬉教

台風の爪跡無言照らす月　佳宵

月の影踏んで敗北の街を行く　久司

気動車にレールをゆずり汽車消える　智

姉の部屋ロマンスぐるみゆずられる　照代

ゆずられた人にゆずって席をたち　延伊知

ゆずる子もないのにますますケチになり　ふみよ

ゆずられて初めて知った舞台裏　一光

ゆずり合うチャンネル風呂へゆく都合　裕美

月青く若者達の歌続く　俊陽一

ポンコツの目覚しもある玩具箱　千寿子

雑草になれぬ心をはがゆがる　美代子

野仏の腰のあたりへ咲く野菊　淳子

開いてはすぼめ扇子に迷いごと　増蔵

ゆずる気のないのが狸寝入する　弘生

赤バケツ団地の砂場に暮れ残り　十郎

金持てぬ耳争えず子に譲り　太茂津

胸襟を開いてほしいもどかしさ　葵水

鉄瓶の重さを姑にゆずりうけ　川口弘生報

城北明朗会

文化財の祭囃子が人を寄せ　三十四

合理化も一寸淋しい村祭　浊水

祭以後太鼓のオヤジで顔知られ　弘生

鯛焼いて子なき夫婦に祭の灯　葵水

神様も矢っ張り祭うれしそう　久子

お祭の気分で年中暮せたら　繁子

ポケットが欲しい浴衣の祭の子　満津子

水都祭浴衣の袖がからみあい　隼人

水都祭花火にまけぬ恋の花　シゲ

出戻りもちとはしやいだ祭の日　春巣

夕涼み花もはじろうミニスカート　秀村

川柳ウイロー社（ハワイ）

汗臭い金で悲願の家が建ち　拝山

働いた汗のにおいを嗅いで見る　雪女

一世の汗は汗でも血が混じり　カロ女

逞ましく打ち込む鍬で玉の汗　河舟

名を呼べば汗ふく真似で屋根の人　三石

終盤へ握りし駒も汗をかき　紅渓

赤銅の肌も頼もし玉の汗　公女

移民から流した汗で今日の幸　あき坊

冷汗の凍るおもいに尚どもり　峯円

やるだけはやって安堵の汗を拭く　暁舟

そっと包み勘当の子に母の慈悲　北海

母の小包特効薬も入れてあり　エス子

誰知らぬ過去を包んだ墨衣　万里歩

小心は包み切れずに打ち明ける　快夢起

包んでも伏せても悪事いつかばれ　椰子郎

いたわりでふんわり包むよい女房　蒼蛇楼

▼おことわり―たけはら・菜の花・ささやま・南大阪の四句会が次号に回わりました。

喪中につき年末年始は欠礼させていただきます

若柳潮花

川柳塔社常任理事会

―十一月四日―

大阪市文化祭川柳大会を成功させようと誓いあい、かねて募集中のバッジ募集作品の審査にはいった。

川柳塔以外のある旬刊誌に本社の企画が掲載されたので、図案のプロから七十二点応募作品があった。川柳関係の作品、四百九点、計四百八十一点がズラリならぶ。

プロの作品はさすがに美しく書いてある。一人で二十四点送ってくださった人が最高だった。

「川柳の選よりむずかしいナ」

「塔を生かした作品をとりたい」

「いや―それではお寺のバッジになるよ」

「やっぱりセンスのあるもの」ということに的がしぼられた。

予選通過四十数作、そこから厳選して十二作が残った。この発表は新年誌上ということになった。

出席―多久志・古方・形水・生々庵・小松園・薫風・一三夫諸氏。

▼**井上吉次郎先生**（枚方市・文博、追手門学院大学教授・毎日新聞社友）から、生々庵主幹の句＝ののしり疲れ反主流派のノルマ＝ここに道あり大人の狡さに通じけり＝にドカンとやしつけられた感じです。はたらくうた特集、まことに結構。とお便りをいただく。

「雅号ぶっちゃけばなし」

かそん　にしもり

西森　花村

（88）　終戦後、私は武部香林さんの導きで川雑に入れて戴いたが、初めは本名の茂を名乗っていた。処が他にも同名があり、しばしば香林さんをがっかりさせたので、香林さんの命名で号を名乗る事になった。私は注文を出した。字画のない事。早く書ける事。悪筆の私には難しい字は自他共に迷惑であるからである。

この失礼な注文に怒りもせず、注文通り命名して戴いたのが花村である。元来私は村には縁のない男だが、花は大好きである。花の盛りの若武者の敦盛さんは、私の夢だった。花に嵐は附きもので、香林さん御夫婦逝き、路郎先生も昇天され、私自身寂りようの感にたえない。花村と書く度に香林さんを思う。

（元郵便局員　一九一〇年十月生）

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄

大阪・東京・京都3店に共通です

高島屋

大阪・なんば　日本橋
東京・四条
京都・

清水白柳遺句集

送料共　¥700

西尾栞句集・水鶏笛

送料共　¥650

万的・杜的共著・的

送料共　¥400

川柳塔社忘年句会

日時　十二月七日（火）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話
「サイレン」　菊沢小松園
「帰省」　本多柳志選
「駐車場」　菊田いさむ選
「家元」　八木摩天郎選
戸田古方選

席題　三題　当日発表
会費　二百円
各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社

1月の兼題「料理」「ねずみ」「山」「カレンダー」

募集

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　川村好郎選
課題吟（各題5句以内）
「非常ベル」　辻圭水選
「赤字」　石坂新雪選
「産院」　石川侃流洞選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳筥をご使用ください。

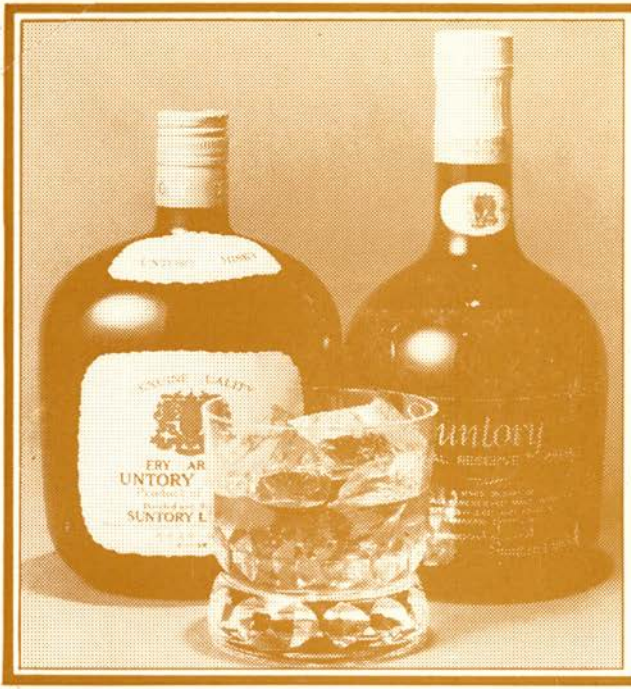
三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　川村好郎選
課題吟（各題5句以内）
「通行止め」　新谷笑痴選
「助手」　井阪東天紅選
「ヒナ祭り」　若柳潮花選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

バッジの入選新年号に発表

定価　百八十円（送料十六円）
半年分　千百七十円（送料共）
一年分　二千二百円（送料共）
昭和四十六年十一月二十五日印刷
昭和四十六年十二月　一　日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番



歳月の波が磨いた——
誇り高き逸品サントリー！

世界のウイスキー
サントリー
リザーブ2700円　オールド1,900円

・ペンペン草・

★本年度の秀句抄も例年のように、二賞候補作品からえらんだ。だがこのほかには二賞候補作には不向きだったが、句としてはすぐれた作品が数多くあったようにおもう。このことは各選考委員も認めていることである。だから本号の秀句抄がそのまま71年度の総決算とはいえないかも知れない。

★十二月はその年の総決算となるわけだが、かっての師走風景のような悲壮感はないようである。一越すに越されぬ年の暮れ。こんなコトバは今の若い人たちには通じないであろう。貸したの借りたのが除夜の鐘までにカタをつけるなど、浪曲的仁義と思うだろうが、カネは泣かせたり笑わせたり怒らせたりするものだ。

★故吉田元首相に一万円ナリを払ってくれと大磯へ手紙を出したことがある。当時の国務大臣増田甲子七氏が会長をしていた〝日本道路美化協会〟募集の入選標語の賞金がウヤムヤになったから、総理が責任をとれといってやったのだ。

★大阪から出したのが一等一万円、東京から出したのが二等五千円だった。五千円は東京の親せきの者が受けとってくれたが、女名前で応募した大阪の分はついに送ってこなかった。所在地が国会第二議員会館だからインチキ募集ではないはずである。同協会の事務局員からことわりのハガキや電話が何回かあったが、どうやらそのあたりで使いこんでしまったのだろうか。

★この話を聞いた社会党のある代議士が「よし、取ってやろう」と交渉してくれたが、そのころにはその協会が解散したあとだったそうだ。「吉川柳の〝役人の子はにぎにぎを能く覚え〟をジでやられたわけである。

★十一月八日付朝日新聞の朝刊〝浪花巷説社会学〟で、これらの話をしたが、こんな話より、標語の賞金で家を買ったとや、娘たちの結婚費用の一部に賞金を使ったり賞品を持って行かせた話のほうが受けたようである。

★この話がまた十五日朝七時、ラジオ大阪の〝訪問〟のコーナーで流がされた。（ナマ放送だったので朝の七時起床はつらかった）

★金がほしい十二月になると、もう一度、標語を開店しようかなと考える。

★執筆諸先生やご購読たまわっている皆様、〝くる年〟もよろしくお願いいたします。

★シンボル・バッジは新年号で発表します。

★年賀広告、感謝。

（不二田一三夫）

▼一日（ついたち）ごとに、おニューを使うのが好きな私。

▼隠岐不静様から頂いた高級姫路革財布をタンスに温めていますが、くる年の元旦用にというのが私のねがいなのです。

▼一日に新しいモノを使うくせに、お金だけは一日には使わないようにしています。

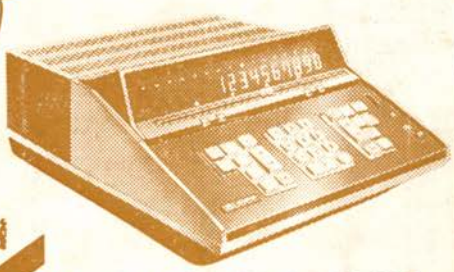
（葉子）

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十六年十二月十五日印刷
昭和四十七年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五三五号

川柳塔 十二月号

定価 百八十円（送料十六円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機
サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

国際観光旅館
うおまたろ
魚又樓

風光明媚な海岸美を誇る

TEL 和歌山（44）0431・1186(代)
大阪案内所（641）3564